

3.2

鳥類



オオルリ

(文・図・写真:大原 均)

鳥、そのほとんどは翼を持ち、自由に空を飛ぶことができる生物です。鳥は長い時間をかけて多様な進化を繰り返し、それぞれの種は大きさや色、体のつくりを変えてきました。また、生きていくために必要な餌内容や取り方だけでなく、棲み場所や活動時間も他種と異なるように変化させてきました。それだけではありません。自分と同じ遺伝子を持つ子孫を残すために必要な種独自の鳴き声と繁殖方法なども取得してきました。こうして分化した種は世界で約9,000種におよび、そのうち530種は我が国で生息が確認されているそうです(日本の野鳥, 1994)。

そして、私たちは今まで、鳥たちとさまざまな関わりを持って一緒に暮らしてきました。それは絵画や歌、物語などに登場する文化的な対象であったり、肉を提供してくれたたり、時には作物を横取りする敵であったりもしました。



ノスリ

す。そして、それぞれの場所にはいろいろな鳥が棲み、さまざまな生活をしています。天竜川を中心とした水辺環境には主にサギやカモ、チドリ、セキレイのなかまが棲んでいます。家や道路の多い集落には、スズメやツバメ、セキレイなどが多く見られます。水田や果樹園などの農耕地の代表種として、ホオジロのなかまやムクドリ、ヒヨドリが挙げられます。段丘崖や山地に広がる樹林にはシジュウカラなどのカラ類をはじめ、ヒタキ・ツグミのなかま、ウグイス、キツツキのなかまなど多種多様な鳥が棲んでいます。また、広い上空を悠然と飛びながら餌を狙うタカのなかまやフクロウのように夜間に活動する鳥も確認されました。この中には最近増えた鳥や減ってしまった鳥、外国から入ってきて棲みついてしまった鳥もいます。

今回の調査を通して町内で確認できた鳥は全部で46科114種でした。それでは、それぞれの鳥が棲んでいる場所や行動について詳しく見てみましょう。

調査とまとめについて

2016(平成28)年から2019(令和元)年にかけて、高森町にいる鳥を調査しました。その基本的な方法として、図のようなコースを歩き、出現した鳥を双眼鏡と自分の耳で確認し、記録するラインセンサス法を用いました。夜間の調査は、町内に何か所かの調査地点に出かけ、生息が予想される種類の鳴き声をスピーカーから流し、それ



高森町の鳥類概要

さて、私たちが住む高森町にはどんな鳥が棲んでいるのでしょうか。

高森町には、河川と池などの水辺、集落や農耕地が入り組んだ平地、急傾斜な土地に樹木が繁茂する山地といったさまざまな環境が広がっていま

3. 高森町の動物



調査コース



夜間調査風景



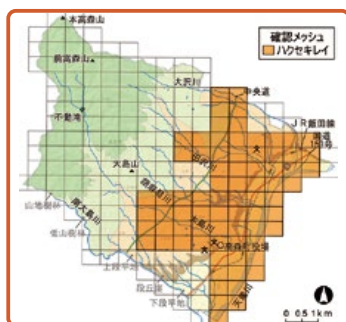
猛禽類調査風景

に対する反応によって確認する方法で行いました。また、遠すぎて確認が難しい猛禽類の調査は、フィールドスコープを使って実施しました。

これらの調査の実施後、各種の出現状況をまとめました。まず、どんな鳥がどの辺りにいたか分かるように、出現場所を、一辺 500m のメッシュ図に示しました。

次に町内の環境を「水辺」「平地(下・上)」「山地(段丘崖・西山地下・西山地上)」の3つ地域に分け、それぞれの出現種をまとめました。

また、特徴的な行動をする鳥や生息数が極端に少ない種類、反対に数が増えつつある外来種について詳しく調べて記載しました。



色付けたメッシュ地図の例

なお、各種の説明の最初の枠内に示した表示は次のような意味を表しています。

種名(科:確認時期[通年・夏期・冬期・短期])

各地域(環境)の出現種

町内全域を標高と環境によって分けると、図のような6タイプに分けられます。

①水辺

天竜川とそこに流れ込む支川および灌漑用のため池です。それぞれには流水域や止水域、^{かんがい}砂礫地、草地などさまざまな環境があります。

②平地(下)

ほぼ南北に走る大きな段丘崖の下に広がる平地で、道路や人家が集中した市街地および田畑や工場などが広がっています。

③段丘崖

天竜川から西側へ500mから1,000mほど離れて並行して走る高さが約100mの崖で、そこは広葉樹、針葉樹、竹などの林になっています。

④平地(上)

段丘崖より上に広がる平地で、まばらな集落と果樹を中心とした畑が広がっています。

⑤西山地(下) ⑥西山地(上)

当町の西側には牛牧山・吉田山・前高森山・本高森山をピークとする山地が広がっています。標高約700mから1,890mで、広葉樹、針葉樹の林が広がり、ところどころに伐採地があります。



標高と環境の区分



水辺に出現する鳥

アオサギ (サギ科: 通年)



アオサギ

川の上空をゆったりと飛ぶ姿を見て、ツルと間違えてしまうことがよくある大きな鳥ですが、天竜川水系で初めて確認した1970(昭和45)年ごろは珍しい鳥でした。

ところが、その後生息数を加速度的に増やし、今ではよく目に付く鳥になりました。初めの頃は主に天竜川の浅瀬で見ましたが、今では小河川をはじめ、水田や池だけでなく山奥の堰堤やダム湖など水があるところならどこでも見るができます。以前、南大島川の上流(弓矢沢)の沢から飛び出してきた、びっくりしたことがありました。

岸辺の浅瀬に立ったり水の中を歩いたりして、魚やカエルなどを長くちばしで捕まえて食べます。そのため、池で魚を飼っている人たちから嫌われている鳥でもあります。いくつかのつがいが集まって、神社や山麓の背の高い木の枝に巣を作り繁殖を行います。高森ではそのような繁殖地はまだ確認していません。

夕方、上空を「グワー・グワー」と鋭い声で鳴きながら飛ぶ姿に少し気味の悪さを感じた人もいるのではないのでしょうか。

ダイサギ・コサギ (サギ科: 通年)



ダイサギ



コサギ

アオサギのほかに天竜川ではダイサギとコサギを確認しました。前者は近年よく見かけるようになりましたが、後者の姿を見ることは少なくなりました。また、以前、このなかまのチュウサギ・アマサギを確認したことがありますが、今回の調査では確認できませんでした。



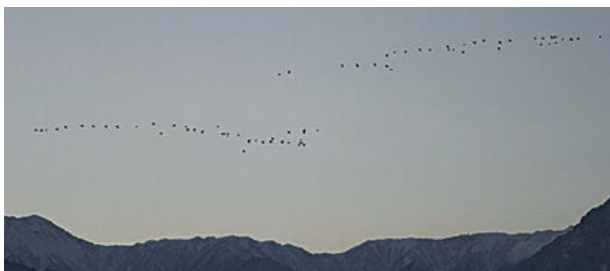
サギ類の確認地点

3. 高森町の動物

カワウ (ウ科：通年)



羽を乾かすカワウ



隊列を組んで飛ぶカワウ (撮影：丸山隆)

カワウは、カラスのように全身が黒く首が長い大きな鳥です。川の上空を集団で並んで飛んだり、石の上で立ち、羽を広げて乾かしていたりする姿がよく目立ちます。今から30年ほど前に、下流の平岡ダムで確認されて以降、年々個体数を増やして今では天竜川全域に分布しています。流れの穏やかな淵や平瀬で、水面を泳いでいたかと思うと突然水中に潜り、アユやウグイなどを捕まえて丸呑みにします。そのため、潜って魚を捕ることができない早瀬や浅い場所はほとんど利用しません。

かつては全国にたくさん棲んでいましたが、だんだんと減り、1980年代には全国の6都県しか、繁殖コロニーが見つからない状態でした。ところが、今では全国的に個体数が増え、繁殖地も各地に広がっています。今度は増えすぎたために、捕食によるアユなどの魚への影響を心配しなければなくなり、最近では琵琶湖をはじめ全国各地で、いろいろな方法でこの鳥の駆除を試みています。天竜川でも、下伊那や上伊那で、銃による駆除を実施しています。そのためか以前は高森でも100羽前後の群れを見ましたが、最近では20羽以上の群れを見ることは少なくなりました。

この鳥は群れ性が強く、たくさんのつがいが集まって繁殖したり(繁殖コロニー)、集団で並んで飛んだり、夜になると周辺の個体がひとつの林に集まって寝たり(集団^{ねぐら}峙)します。

カモのなかま (カモ科)

冬になると、町内のため池などではカモたちがゆっくり泳ぐ光景が見られるようになります。また、天竜川の流れが緩やかな淵や平瀬に浮いている姿や支流の枯れ草などの陰に隠れていたカモが、驚いて飛び出す場面を見ることがあります。

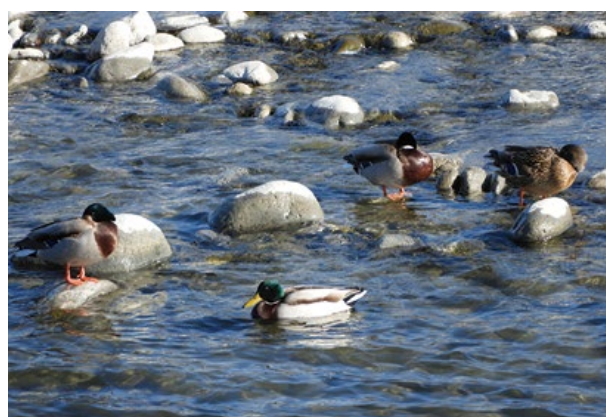
カルガモ (カモ科：通年・冬期)



くちばしの先の黄色が目立つカルガモ

町内で見かけるカモの中で、1年中姿を見ることが出来るのは、カルガモだけです。きっと水田のまわりの草むらや、池のヨシが茂った場所などで繁殖しているのでしょう。昼間は池などでゆっくり休んでいます。夕方になると水草や、草の実などを食べに出かけて行きます。

マガモ (カモ科：冬期)



マガモ

カルガモと同じく大型のカモです。雄は頭部の緑色が目立ちますが、雌はカルガモに似て地味な色をしています。狩猟圧のために昼間は川の淵や池で休息をとって、夜になると湿地や水田に出か

け草の葉や種子など拾って食べたり、泳ぎながら水面に浮く餌をくちばしでこして食べたりします。天竜川では20～30羽が集まってカルガモたちと一緒に過ごす姿がよく見られます。

コガモ (カモ科：冬期)



コガモ (撮影：角屋明美)

カルガモより2回りほど小さい最小のカモです。雄は頭部が焦げ茶色で、眼から後頸にかけて深い緑色をしています。雌の顔は地味な灰褐色をしています。繁殖期には北海道や本州の山岳地域で少数生息するようですが、町内では非繁殖期によく見られる冬鳥です。昼間、数十羽で天竜川の岸边や池などで泳いでいる姿を目にしますが、夜になると水田や湿地へ出かけ、歩きながら草の実や葉を食べたり、水面に浮いて水草をついばんだりして過ごします。

ヒドリガモ (カモ科：冬期)



ヒドリガモ

松本、諏訪地方の湖沼では冬鳥として数多く見られますが、町内で確認することは珍しいカモです。今回は間ヶ沢堤とその周辺の畑で観察されました。雄の頭部は明るい褐色で、くちばしの付

け根から頭上にかけてうす黄色の帯があるので識別することは簡単です。雌の頭部はやや赤みを帯びていますが雄のよううす黄色の帯はありません。水面を泳ぎながら過ごし、時々逆立ちして水中の植物などを食べます。

オカヨシガモ (カモ科：冬期)



オカヨシガモ

雄も雌も全体的に地味な灰褐色をしたカモなのであまり目立ちませんが、よく見るとほかのカモに混じっていることがあります。特に、雌はマガモの雌によく似ていますが、くちばしや羽の後ろの模様の色で区別できます（白ならこのカモで青ならマガモ）。

カワアイサ (カモ科：冬期)

雄の頭部は黒く、雌の頭部は明るい茶色で色は違いますが、どちらも後頭部が膨らんで見えることは似ています。天竜川では、冬期に雄と雌が連れ添って泳いでいる姿がよく観察されます。この鳥は魚食性なので、近年になって大群でやって来る諏訪湖では、その食害に頭を悩ませています。天竜川でも最近個体数が増えているので、今後、魚への影響が心配されます。



カワアイサ

カイツブリ (カイツブリ科：冬期)



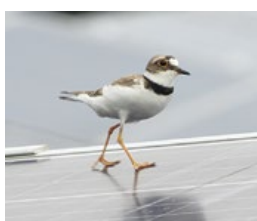
雛を連れるカイツブリ (諏訪市 撮影：丸山隆)

2018 (平成 30) 年の冬に、天竜川の万年橋下と明神橋下の淵で泳いでいる姿を見ることができました。その他にも、下市田の天竜川の平瀬でも確認できました。ほとんどの場合、2羽で少し距離をとりながら浮いていることが多く、お互いに水中に潜っては餌を探しています。そのような場所にはカモのなかまも一緒に棲んでいますが、この鳥はカルガモやマガモより一回り小さいことと、常に水面に浮いていて時々水中に潜ってしばらく見えなくなる行動を繰り返すことから見つけることができます。今回の調査では冬だけの確認でしたが、どこかで繁殖しているかもしれません。

イカルチドリ (チドリ科：通年)



イカルチドリ



天竜川の水辺で餌を探しながらゆっくり歩いたり、砂礫河原をチョコチョコ歩いたりする姿がかわいらしい鳥です。ときどき弱い声
コチドリ でヒッヒッヒッと鳴きなが

ら水面や地面すれすれに飛ぶ姿が観察されます。小石が並ぶ河原にわずかにくぼみを作って産卵しますが、巣や卵が他者に見つからないようにするためか、小石にそっくりな卵を産み巣材もほとんど使いません。このなかまのコチドリは、春になると高森町にやってきて、下市田の天竜川の砂礫河原で繁殖します。

イソシギ (シギ科：夏期)



イソシギ

天竜川の岸辺を尾を振りながら歩く姿がよく観察されます。体の色が石や砂に似ているのでなかなか見つかりません。危険が迫ると水面すれすれを「チーリーリー」と鳴きながら直線的に飛び、その時、羽の白い帯がよく目立ちます。

カワセミ (カワセミ科：通年)



池のフェンスに止まり魚を狙う

後頭部から背のコバルトブルーとオレンジの胸が美しいので、人気のある鳥です。ところが、神経質な鳥で、人が近づくとすぐに「チーッ」と細い声で鳴きながら水面近くを飛び去ってしまい、姿を見ることはなかなか困難です。天竜川や支流の浅くて流れの緩い場所で、川に突き出た木

の枝や大きな石の上にじっと止まっている姿をよく見ます。そして、水中を見つめていたかと思うと、突然鋭く水中に飛び込み長くちばしで魚を捕まえて、また止まり木に戻り、魚を頭から飲み込みます。巣は岸辺の土手などにできた垂直な土の壁に奥行き50cmぐらいの穴を掘って作ります。



巣穴

高森町でカワセミが確認された場所は、図に示したように、天竜川とそこに流れ込む支流の下流部と農耕地に囲まれたため池でした。まだ繁殖の確認はできていません。



カワセミの確認地点

カワガラス (カワガラス科 : 通年)



水中で虫を捕まえる

ほとんどの生活を川で過ごす、カラスの色をしたムクドリぐらいの大きさの鳥で、支流の代表種です。谷川を「ビィッビィッ」と鳴きながら水面すれすれに飛んだり、流れの中を歩いたり、水中にもぐって

餌をあさったりする姿をよく見ます。高森町では1年中河川に棲んでいます。しかし、冬期には天竜川で見かけても、春から夏には支流でしか見られません。季節によって周辺の川を移動していることが考えられます。

石の上などに止まった時に尾羽を立て腰を上下に振っているのが特徴的です。堰堤や滝の壁にできた穴にコケで巣を作って、子育てをすることがよく知られています。高森町では大島川、南大島川、大沢川の堰堤で繁殖の確認ができました。見つけた巣からは親鳥に餌をねだるひなの大きな声が聞こえ、それに答えるように親鳥が川の中から捕まえた虫を子どもたちに運んでいる光景を見ることができました。



堰堤に作った巣で子育て

オオヨシキリ (ヨシキリ科 : 夏期)



大きな声でさえずるオオヨシキリ

天竜川の河川敷に生えているヨシやススキに止まって元気よく「ギョギョシギョギョシ」とさえずる鳥はこのオオヨシキリです。この鳥は密生したヨシ原では雄がおおよそ25m 間隔で縄張りを持ち、複数の雌とつがいになって子育てをします(一夫多妻)。最近、河川工事により天竜川のヨシ原が減っているので、この鳥の今後の生息場所が心配されます。

セキレイのなかま

高森町でよく見かけるセキレイのなかまは「キセキレイ」「ハクセキレイ」「セグロセキレイ」の3種です。そして、それらは少しずつ違う生活をしています。

セグロセキレイ(セキレイ科：通年)



セグロセキレイ

天竜川の砂礫地や岸辺の水辺をチョコチョコ歩いている尾の長い白黒の鳥です。また、農耕地に現れ、水田や用水路に入って歩いている姿もよく見ます。

主に水生昆虫を食べますが、陸上の飛んでいる虫に飛びついたり、浅瀬にいる魚の稚魚をくちばしで捕まえたりすることもあります。建物など人工物の隙間に巣を作って子育てを行います、生活のほとんどは川に依存しています。

この鳥とよく似ているハクセキレイとは頭部が黒く過眼線が白いことや、背の全体が黒いことで区別できます。

ハクセキレイ(セキレイ科：通年)

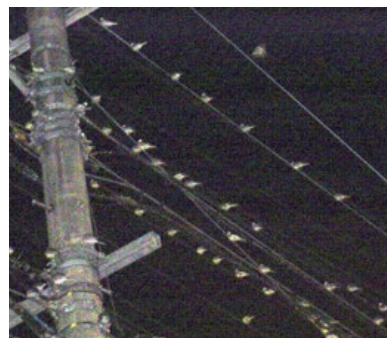
30年ほど前には冬鳥だったハクセキレイですが、1991(平成3)年に明神橋で繁殖が初めて確認されたことにより(大原, 1991)、留鳥(通年同じ場所に棲み繁殖をする鳥)のなかま入りをしました。その後、加速度的に繁殖個体数を増やし、今ではごく普通に見られるセキレイとなりました。

この鳥は天竜川や支流などでも姿を見ますが、どちらかという人間が住んでいる場所での生活が多く、人家の周りや駐車場などを歩く姿をよく目にします。



ハクセキレイ

秋から冬にかけては、集団で寝ることが多くなります(集団^{ねぐら})。夜、街灯や商店のネオン灯などで明るい場所付近の構造物や樹木に、数十羽が集まって眠るのです。高森町でも、スーパーのネオン灯などが光る場所近くの構造物や樹木に集まって眠ります。



罫入り前のハクセキレイの群れ(市街地の電柱)

キセキレイ(セキレイ科：通年)



支流の代表種キセキレイ

なぜか支流にはこの鳥が似合います。集落や農耕地にも出てきて、チョコチョコ歩きながら餌を探す姿も見ますが、生活の中心は川と言えます。中でも小さな用水路や支流では、他のセキレイがあまり利用しないこともありよく目につきます。また、夏期は山奥の谷川や小さな沢でも間違いなくこの鳥の姿を観察できます。

しかし、繁殖をする場合は人里に棲んで、人家の周りの構造物や積まれた物の隙間などに作った巣に産卵し、近くの水辺で餌を捕っては雛ひなに運ぶことが多いようです。



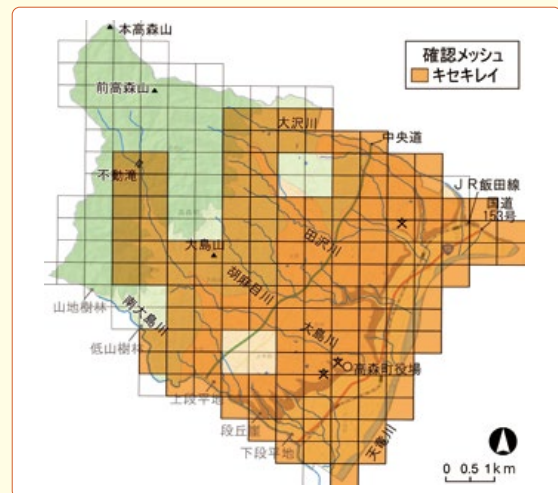
雛へ餌を運ぶ雌



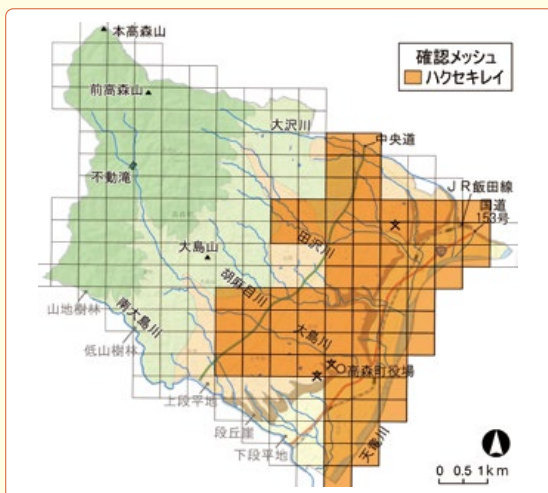
郵便受けの巣で雛に餌をやり終えた雄

コラム セキレイ 3種の違い

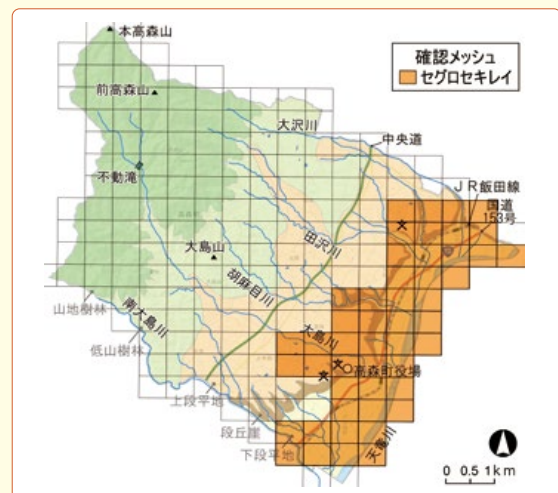
セキレイ3種の生活を比べてみると共通点と異なる点があります。共通点としては、巣を人工の構造物の隙間などに作ることや、水辺や農耕地などで餌を捕ることです。異なる点は、次の図のように棲んでいる範囲が違うことです。キセキレイは天竜川から支流の上流まで広い範囲に棲んでいるのに対し、ハクセキレイは天竜川から上段平地の範囲に棲み、支流の上流へは入り込みません。一方、セグロセキレイは天竜川から遠い上段平地には棲んでいません。また、秋から冬にはハクセキレイとセグロセキレイは集団で眠りますが、前者が100羽以上集まるのに対し、後者は10～20羽程度です。一方、キセキレイは冬期でも単独で眠ります。



キセキレイの確認メッシュ



ハクセキレイの確認メッシュ



セグロセキレイの確認メッシュ

 平地の鳥

スズメ (スズメ科：通年)

常に私たちの家の周りに棲み、目立つこともなく邪魔にならない鳥で、昔から物語や絵画などに登場してきました。主に、家の周りの農耕地や庭、公園で虫や草の



スズメ

種子などを食べていますが、時には家畜の餌や家庭ゴミをついばむこともあります。

建物の屋根の下や構造物の穴などに枯れ草を集めた巣で子育てを行います。ところが、最近は家の構造が変わり、屋根の隙間や穴などが少なくなってしまったために、巣の場所を確保するのに苦労しており、特に都会ではビルが多くなったためか生息数が減ってきているそうです。

やがて卵から雛が誕生すると、初めは消化のよい昆虫の幼虫などを運びますが、後半にはつぶした未熟種子を与えるようにして、だんだんと穀物食になれさせていきます。

巣立った雛たちは集団で時をとるようになり、その群れはだんだんと大きくなって、天竜川のヨシやススキの草原へと移っていきます。やがて、冬が来る前に子どもたちは生まれた土地を離れ、新天地を求めさすらいの旅に出るのです。

昔、足輪を付けて行われた研究では新潟県で生まれた子どもが三重県で見つかったという報告があります。はたして高森育ちの子どもたちはどこへ行って暮らしているのでしょうか。

下伊那地方にはスズメが生息していない山間集落があります。高森町ではすべての集落で生息を確認しました。



枝に群れるスズメ (撮影：植松永至)

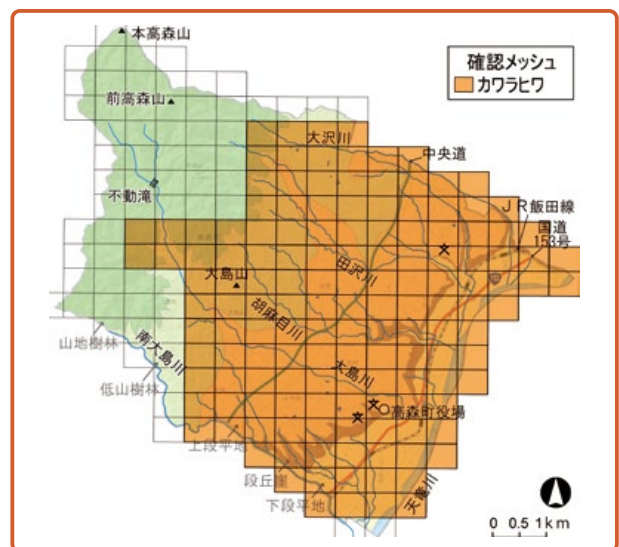
カワラヒワ (アトリ科：通年)



カワラヒワ

人家周辺や農耕地だけでなく河原、里山など幅広い場所に棲んでいて、スズメとともに人間と比較的距離に近い鳥です。下伊那地方の山間には、スズメに替わって人間と一緒に棲んでいる集落があります。

イネ科やタデ科・マメ科などの草の種子を主食とし、短くて太いくちばしでつぶして食べます。卵から孵った雛には親が皮をむいていったん飲み込み、そ嚢に貯めた胚乳を餌として与えます。お椀型の巣を林の木や庭木の枝に作りますが、最近はこちらのビニール紐が入っていることが多くなりました。秋から冬には農耕地や河原の草地で群れになって生活します。



カワラヒワの確認メッシュ

ムクドリ (ムクドリ科：通年)



草地で餌をとるムクドリ



水田に集まって採食

ムクドリはスズメより一回り大きく、黄色いくちばしと足が目立つ鳥です。この鳥も人間生活との関係が深く、水田や畑を耕していると決まってこの鳥たちが集まってきて虫を探し始めます。秋から冬には果樹園の木の残っている柿や地面に落ちているリンゴをつついて食べています。春になると民家の屋根裏に枯れ草を運んで巣を作り雛を育てます。

この鳥はお互いに仲がよく、水田や畑で数羽が集まって餌を食べたり、秋から冬には周辺の地域に棲むなかまが1,000羽以上同じ場所に集まって眠ったりします(集団^{むぐら}罫)。

下伊那地方には、春から夏には棲んでいても秋から冬はいなくなるという場所があることから、季節によって移動する個体群もいるようです。高森町では通年観察することができますが、冬には他地域の個体が加わっているかもしれません。

コムクドリ (ムクドリ科：通年)



電柱の雄



屋根の雌

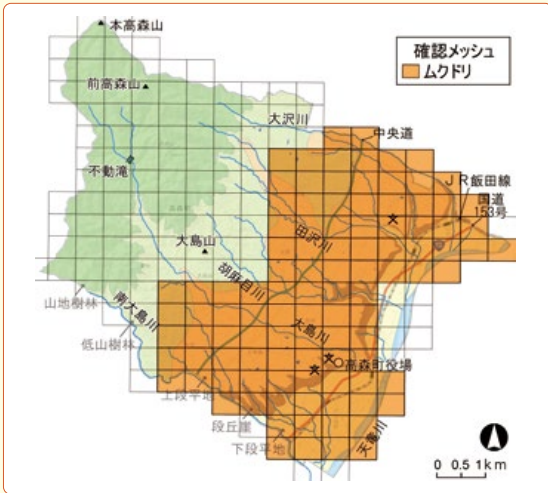
この鳥はムクドリより少し小柄で、雄の頸部はクリーム色で、頬から後ろにかけて明るい茶色の模様があります。一方、雌は体全体が地味な灰色をしています。

一般にこの鳥はムクドリと違って、集落よりも林に好んで棲み、樹洞などで子育てを行うと言われていますが、高森町では下市田の集落に棲んでいます。大島川横の集落では、電柱や電線に止ったり、屋根の隙間へ餌を運び込んだりしている姿を観察しました。

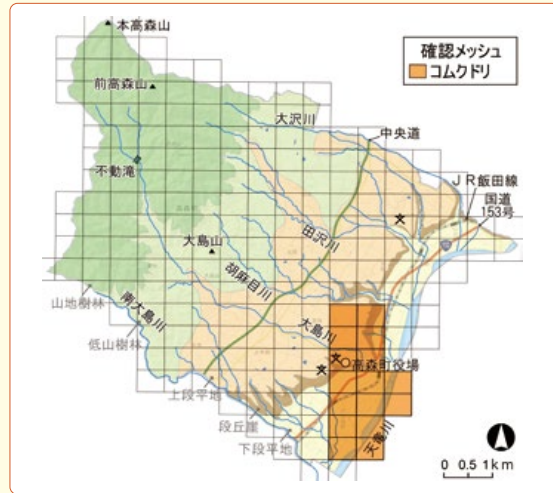
コラム ムクドリとコムクドリの出現場所の違い

この2種で大きく異なるのは、色や大きさだけでなく、ムクドリは一年通して高森町に棲む留鳥であり、コムクドリは春にやってきて、秋去っていく渡り鳥であることです。

また、高森町の場合、それぞれの出現場所に大きな違いがあります。ムクドリは人家の周りだけでなく、田畑の広がる平地ならほとんどの場所に出現していますが、コムクドリの場合は樹林よりも人家が多い集落に生息していることです。



ムクドリの確認メッシュ



コムクドリの確認メッシュ

ホオジロ (ホオジロ科: 通年)



アカシアの枝で元気よく囀る雄

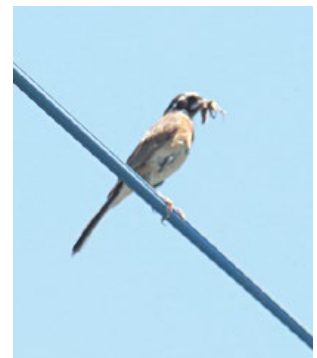
田畑の周りや集落のちょっとした草むらや茂みに棲み、よく目にするスズメに似ている鳥です。特に林の周辺部のやぶならほぼ間違いなく出会うことができるでしょう。普段はやぶの中で地上を歩きながら、落ちていた草の種子などを拾って食べたり虫を食べたりします。

この鳥は縄張りを守るために、雄は春と秋に

は樹木の頂きで元気よく囀ります。その鳴き声は「一筆啓上つかまつり候」と聞こえるという人もいます。しかし、やぶの中でチョコチョコ歩いたり枝を細かに移ったりする時は、雄も雌も「チチッ、チチッ」と小さな声で繰り返すだけです。子育てのための巣は、地上のくぼみに枯れ草や落ち葉を使って腕形に作ります。卵から雛が孵ると親鳥たちは雛たちのために一生懸命昆虫を運びます。



巣と卵



雛の餌を持ってきた雌

キジとそのなかま

キジ (キジ科：通年)



キジ 雄



キジ 雌

水辺の鳥やタカのなかまを除いた野鳥では最大級の鳥で、日本の国鳥に指定されたり昔話に登場したりすることで人々に親しまれている鳥です。林の周りや農耕地周辺の草原で、飛ぶことを極力減らし、歩きを中心にした生活をしています。青緑色の顔、赤い肉垂、そして「ケーンケーン」という大きな声で鳴く雄に対し、ほとんど鳴かない雌は地味な薄茶色をしているので目立ちませんが、雄と一緒に時や雛を連れている時には簡単に見つかることがあります。木の下の草むらへ巣を作り繁殖しますが、配偶形態は一夫一妻ではなく乱婚ではないかといわれています(丸, 1988)。

キジのなかまの雛たちは卵から孵ると、巣から出て母親の後を付いて歩き、自分で餌を食べながら成長していきます。これはチドリやシギなどの水鳥にも見られる行動で、地上の巣に留まっていると、天敵に襲われる心配があるので、それを避けるために進化した行動と考えられます。

ヤマドリ (キジ科：通年)



林から出て来た雄 (撮影：浜口あかり)

キジとよく似た体型をしていますが、雄にはキジのような青緑の部分はなく、全体的に赤みを帯びた茶色をしています。雌はキジと同じような地味な薄茶



登山道に落ちていたフン

色で目立ちません。キジと違い、樹林の中で暮らす山の鳥で、用心深い鳥なのでなかなか姿を見ることはありません。しかし、登山道に落ちているフンを見つけたり、警戒や雌へのディスプレイの時に出す羽ばたき音を聞いたりして、この鳥の生息を確認することができます。

コジュケイ (キジ科：通年)

役場南の段丘崖から「チョットコイ・チョットコイ」と朗らかに大きな声で鳴く鳥がコジュケイです。チャボくらいの大きさで、全体は暗い茶色をしています。顔の部分は赤みを帯びた茶色です。やぶの茂った林などに棲み、地面の草や落ち葉の下の木の実や虫などを食べています。雛連れの家族が道路を横切る姿を見かけますが、驚くとそれぞれがばらばらに低く飛び林に潜り込んでしまいます。

元来、中国南部に生息する鳥ですが、1920 (大正9)年頃に狩猟鳥として日本に放鳥されました。今では、自然繁殖によって数を増やし、九州から東北までの雪の少ない地方に生息しています。

キジのなかま 棲む場所の違い

高森町に生息するキジのなかま3種の確認地点図から、それぞれの種類の生息場所の特徴がわかります。キジが多く見られたのは、天竜川の河川敷に発達した草原や各段丘に広がる農耕地の周辺でした。それに比べ、ヤマドリは町の西山地の樹林内に出現しています。これからキジとはまったく離れたところに棲んでいることがわかります。一方、コジュケイは段丘崖や支流の両側の崖に帯状に発達した林に棲み、天竜川の近くや山地の奥には棲んでいないことがよくわかります。



キジのなかまの確認地点

ムクドリくらいの大きさの鳥で、腹部の灰色と背下部の青い羽根が目立ちますが、最も印象的なのは黄色い太いくちばしです。樹木の堅い実(豆)や芽を砕いて食べるために太いくちばしが発達してきたのでしょうか。近年、分布を広げているマメ科のニセアカシアが生える、段丘崖や支流脇の斜面でよく姿を見かけるようになりました。高森町では季節によって姿を見せたり見せなかったりするので、時期によって棲む場所を変えているかもしれません。

モズ(モズ科: 通年)



モズ

鋭いくちばし

畑に植えられた柿やリンゴなどの木の下枝に止まり、下を見ながら尾羽を回すように動かしている姿をよく見かけます。地表に小さな動物を見つけると、素早く飛び降りて捕まえ、また枝に戻ります。スズメと同じくらいの体格なのに、カエルやバッタを襲うことができるのは、くちばしの先が下に曲がり鋭くなっているからです。秋から冬にかけて、捕まえた虫を枝の先などに刺しておく「はやにえ」はこの鳥の仕業です。巢を灌木の枝の中に作って、子育てを行います。

この鳥の中には、春先に高原へ上って繁殖を行い、秋には里へ降りて生活する個体があります。ところが、モズは一年中縄張り意識が強いので、山から下りてきた個体が里の個体の棲み場所に入ると、激しい争いが始まります。お互いが木のでっぺんで「キチキチキチ」と大声で鳴き合う光景は「モズの高鳴き」と呼ばれ秋の特徴的な行動です。雄はその時期になると、違う種類の鳥の鳴き声を真似ることがありますが、その理由はよく分かっていません。この鳥を漢字で「百舌鳥」と書くのはそのためです。

イカル(アトリ科: 通年・夏期)



イカル

木のでっぺんで、「キーコー キーキー」と大きな声で鳴く姿や、「キョッ・キョッ」と短い声で鳴きながら数羽で飛ぶ姿をよく見かけます。

メジロ (メジロ科：通年)

花の蜜を食べるメジロ



リンゴに来たメジロ

早春、吉田の段丘で満開となった梅や桜の花に、十数羽の目の周りが白いメジロがやってきます。細いくちばしを花の中に差し込んで、奥にある蜜を食べているのです。

秋から冬には果樹園に10羽ぐらいの群れでやってきて、枝に残った柿やリンゴをついばむ光景をよく見かけます。また、庭木の枝にリンゴやミカンを刺しておく、たいてい2羽でやってきてかわいらしい姿を見せてくれます。このように、メジロはヒヨドリと同じように甘い物が大好きな鳥です。

しかし、この鳥は花だけを食べるわけではなく、木の葉の裏などに付いている虫もたくさん食べます。特に、子育ての頃は雛たちにたくさんの虫を運んでいきます。その時は、細い小枝にクモの糸などを使ってハンモックのような形をした吊り巣を作ります。

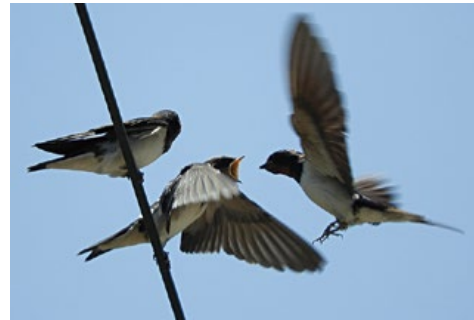
集落の周りや段丘崖の林だけでなく、西山地山麓の広葉樹林でもよく見かける鳥の一種です。



メジロの巣と雛

ツバメ (ツバメ科：夏期)

毎年、春になると南の国からやってきて平地の上空を盛んに飛び回り、軒先に巣を作るのでスズメとともに誰にもよく知られた鳥です。害虫を捕ってくれたり、電線に並んだ雛に親鳥が一生懸命餌を運ぶ様子を見せてくれたりするので、昔から人々



電線の雛に餌を与える親鳥

に愛されています。この鳥は、地面で巣に使う泥を集める時と巣の中の卵や雛を抱いている時以外は、休むことなく空を飛び回って飛んでいる虫を捕まえています。そのために虫が入りやすいように幅広いくちばしが発達し、脚は弱々しくなったのでしょう。



巣材の泥を集めるツバメ

イワツバメ (ツバメ科：夏期)

中央道のガード壁に並ぶイワツバメの巣

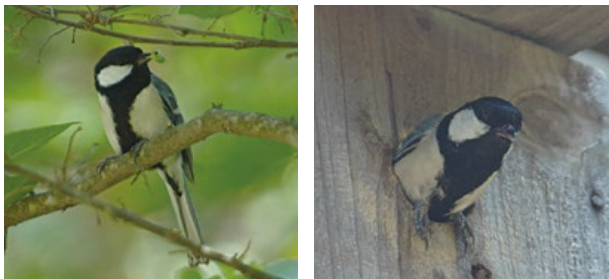
イワツバメはツバメのように2つに分かれた長い尾を持たず、腰の白色が目立ちます。かつては山の岩場に巣を作ることから高山の鳥と考えられていましたが、最近は人里にあるコンクリートの建造物や橋などに巣を作るようになり、里の鳥のなかま入りをしました。病院や学校の壁に巣を作り、壁を汚すだけでなくフンを落とすので、困った関係者は巣を落したり網を張ったりして、この鳥が近づけないようにしています。

ツバメは普通1つがいの親が別々の場所に分かれて巣を作りますが、イワツバメはいくつもの親たちが集まって並んで巣を作り子育てをします。高森町で確認した巣場所は平地にある道路のガード下や橋がほとんどでしたが、不動滝より上流の岩場にもあるかもしれません。

 山地の鳥

シジュウカラとそのなかま (カラ類)

シジュウカラ (シジュウカラ科：通年)



シジュウカラ

天竜川の河畔林から山地の頂上まで広い地域に生息し、森林だけでなく集落や河川、農耕地でも樹木があれば棲むことができる鳥です。「ツピーツピー・ジュクジュク」と鳴きながら、主に樹林の下層部を移動し、枝葉にいる虫を主食にしていますが、冬は植物の種や果実を食べることもあります。

1年中ほぼ同じ場所で過ごし、生きている限り、つがいは替わらないそうです。春から夏にかけて、樹洞や人工物の穴、石垣などに苔を集めて作った巣に産卵して子育てを行います。ひまわりの種など入れた餌台や板で作った巣箱をよく利用する身近な鳥です。他のカラ類と似ていますが、シジュウカラは白黒のツートンカラーで胸に黒いネクタイをしているので見分けがつかず。

ヤマガラ (シジュウカラ科：通年)



餌台にやってきたヤマガラ

白黒をした鳥が多いこのなかまの中で、唯一茶褐色をしています。また、他のカラ類は高森町の山地の頂上まで棲んでいるのに対し、どちらかというとならぬと標高が低い林を好み、標高が1,000m以上になると数は少なくなります。段丘崖の樹林、人家の庭木、集落の小さな林など私たちの周辺でよ

く見る鳥です。木の枝先から地面まで広い場所を移動しながら、虫や木の実や種などを食べます。秋には、冬の食料となる小さいドングリやイチイの実を、朽ちた木の割れ目に何度も運び、皮の裏側や割れ目に隠す行動(貯食行動)が見られます。春には樹洞や人工物の穴などにコケ類を運び込んで巣を作り子育てを行います。

ヒガラ (シジュウカラ科：通年)

白と黒で配色され、このなかまの中では最も小さな鳥です。繁殖期は高森町の山地では下部から稜線までの



ヒガラ

全域で姿を見ることができます。中でも、スギやヒノキなどの針葉樹林に好んで棲み、針葉樹の小枝や葉の間をくぐりながら、小さな虫を捕まえたり種子をついばんだりします。秋から冬にかけては、どこからかやってきて、平地の杉林で大きな群れを作って生活している姿を見ることができます。春になると、樹洞や木の割れ目にコケを運び込んで巣を作り、子育てに励みます。人間が作った巣箱もよく利用します。

コガラ (シジュウカラ科：通年)

ヒガラやシジュウカラと同じように、白と黒のツートンカラーの鳥ですが、頭部の黒い部分は帽子をかぶっているように頭



黒い帽子をかぶったようなコガラ (撮影：角屋明美)

繁殖期には、他のカラ類が標高1,000m以下の山地にも棲んでいるのに対し、この鳥はそれ以上の山地を主な生息場所としています。中央アルプスなどの高山では、稜線近くのダケカンバ林でも姿を見ることができるので、高山の鳥ともいえます。

木の葉が落ち、山に冬が訪れると、高い山から下りてきて、上段道路周辺の樹林でヒガラやコガラなどと群れ（混群）を作って過ごします。やがて、春を迎えると再び山を上り、芽吹き前の枝先に止まり「ヒーツキーツキー」と透き通った声で囀って、山に春が訪れたことを教えてくれます。

広葉樹の枝を上り下りしたりぶら下がったりして皮や葉の裏に隠れている虫を見つけて食べています。

虫も少なくなる冬には木の実などを食べるが多くなり、ヒマワリの実を入れた餌台を用意してやると、盛んに訪れるようになります。

春になると枯れ木などに穴を掘って巣をつくり、子育てします。

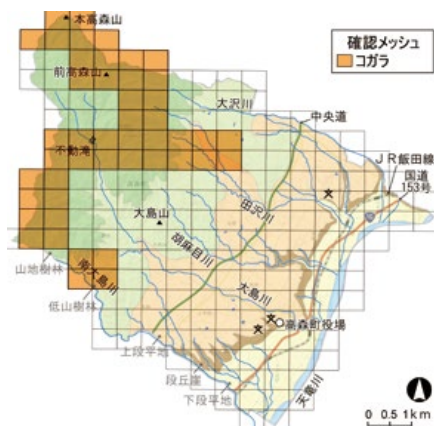


ヒマワリの餌台に来たコガラ

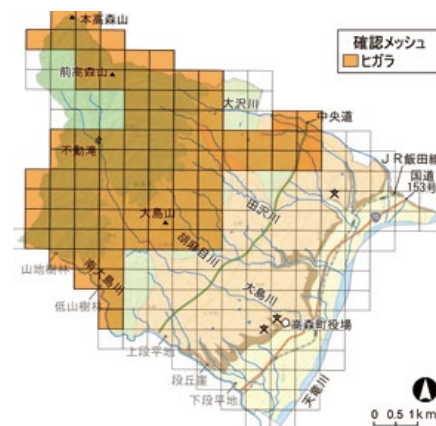
コラム カラ類各種の棲み場所の違い～夏期～

高森町の山地には4種類のカラ類が棲んでいます。夏の間のそれぞれの生息場所には図のように微妙な違いがあります。

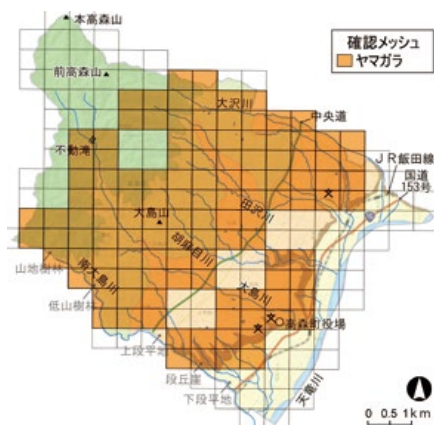
コガラは主に西山地の上部に棲み、ヒガラは上部だけでなく山地の下部まで広く利用していますが、里までは出てきません。一方、ヤマガラとシジュウカラは山地だけでなく、里でも姿を見ることが出来ます。しかし、里のヤマガラは段丘崖の樹林には多く出現しているものの、上段や下段の農耕地が広がる平地では出現が少なくなります。それに比べ、シジュウカラは農耕地や集落、天竜川近くなど、どこでも樹木があるところなら生息しているので、高森町のカラ類では最も広い範囲に分布している鳥と言えます。



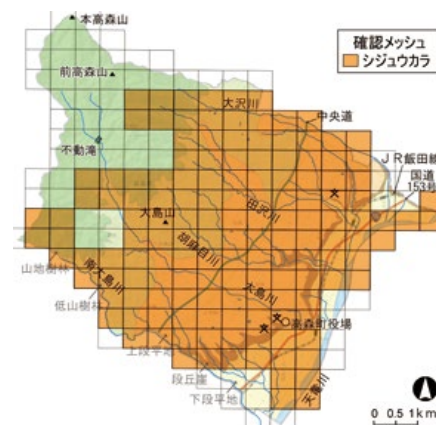
コガラの確認メッシュ



ヒガラの確認メッシュ



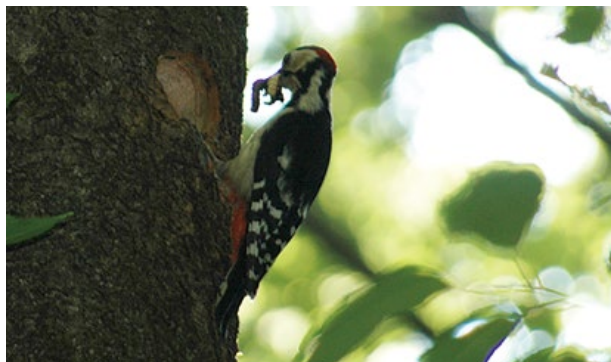
ヤマガラの確認メッシュ



シジュウカラの確認メッシュ

キツツキのなかま

アカゲラ (キツツキ科：通年)



樹洞の雛に餌を運ぶ親鳥

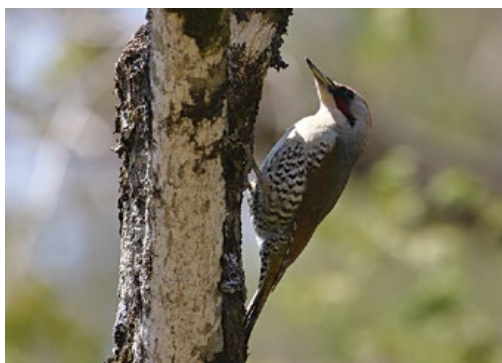
アオゲラより一回り小さく、体全体は白と黒が入り組んだ色をしています。頭と下腹部の赤い部分がよく目立つキツツキです。大きな広葉樹が生えている林に棲み、幹や太い枝を縦に登りながら、丈夫なくちばしで幹をつついて中にある虫をつまみ出して食べます。針葉樹や若木の林は幹に虫が少ないため、ほとんど利用しません。林の中で「キョッ・キョッキョッ」と短く鋭い声が聞こえたら、この鳥か後述のアオゲラと違っていいでしょう。高森町の西山地全域と段丘崖の樹林に棲んでいます。数はそんなに多くはありません。

生木の幹や太い枝にくちばしで穴をあけ、その中で子育てをします。穴の中の巣だから安全だと思いきや、蛇に雛を襲われてしまうこともあります。



樹洞の雛を襲ったアオダイショウ

アオゲラ (キツツキ科：通年)



アオゲラ (撮影：角屋明美)

アカゲラより一回り大きく、キジバトより少し小さい鳥です。体全体は黄緑色をしています。後頭部に赤い部分があります。

広葉樹の大木を中心とした林に生息し、幹や太い枝に縦にとまり、丈夫なくちばしで幹や枝をつつき中の虫を捕まえます。ときどき「キョッ・キョッ」とアカゲラと同じような声で鳴きますが、アオゲラの場合、「ピョー・ピョー」と強い声で鳴くことがあるので聞き分けることができます。また、幹を素早くくちばしでたたき、求愛や縄張り防衛を目的としたドラムを連打するような音を出すこともあります。これはドラミングと言われアカゲラも行います。

コゲラ (キツツキ科：通年)



巣穴を掘るコゲラ

キツツキのなかまでは一番小さく、平地から山地まで広い範囲に棲んでいます。明るい広葉樹林が好きです。山の林だけでなく、庭木や果樹にも訪れることも多いので出会うことの多い鳥です。ときどき「ギー・ギー」と声を出し、木の幹や枝を上へ下へと移動しながらくちばしでつつき、中にある虫を探します。

春になると、自分で幹に穴を開けて巣を作って子育てをします。秋から冬にかけては、シジュウカラやエナガなどの群れに混じって過ごしますが、その時はたいてい2羽で行動しながら群れの一番最後をついて行きます。その時は幹の虫だけでなく熟した柿の実をつつくこともあります。

夏鳥の代表種

オオルリ (ヒタキ科：夏期)

美しい声で囀る雄さえず

人家の柵に来た雌

春先、南の地方からやってきて、低地から亜高山下部までの明るい林に棲みますが、谷川沿いの傾斜地を好むようです。

段丘崖や山地の谷沿いの林ではよく見かける鳥の一種です。渡ってきて間もない春先、濃い瑠璃色の背と白い腹部が目立つ雄は、高い木の梢に止まり大きな美しい声で囀るのでよく目立ちます。雌は地味な色なのであまり目立ちません。

普通は崖や岩のくぼみにコケで巣を作り繁殖しますが、巣箱や建物の隙間などに巣を作ることもあります。他のヒタキ科の鳥と同様に、枝に止まり、空中を飛び回る虫を見つけると飛びついて捕まえます。



前開きの巣箱で繁殖

キビタキ (ヒタキ科：夏期)



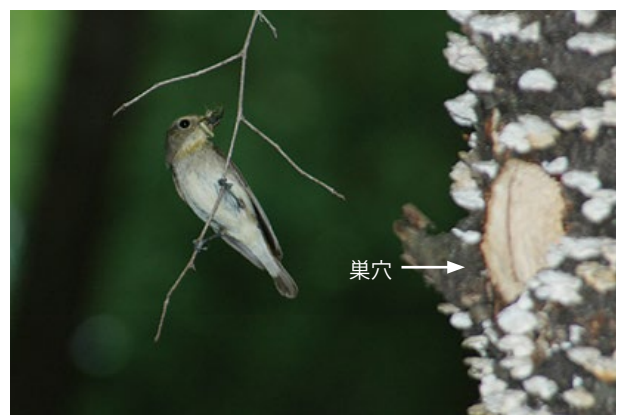
キビタキ

西山地や段丘崖の樹林に生息していますが、針葉樹よりも広葉樹の多い明るい林を選んでいるようです。繁殖期に、胸の鮮やかな黄色を誇示しながら、木の枝で「ポッポロリー・ポッポロリー」と強く囀る姿には魅了されます。派手な雄に比べ雌は地味な色をしているので雌雄の区別は簡単です。

普通は幹の浅い穴や割れ目に枯れ葉などを運び込んで巣を作って雛を育てますが、木の穴などが少ない林に、前板のない巣箱を用意してやると、そこで子育てをすることがあります。



前開きの巣箱を使って子育て



雌と木の穴の巣

コサメビタキ (ヒタキ科：夏期)



枝に止まり飛ぶ虫を探す

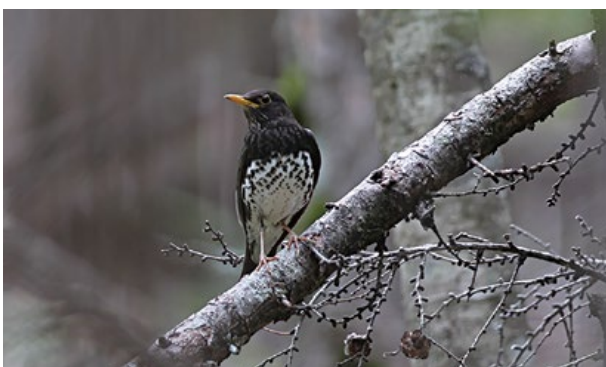
春、南の地方からやってきて、段丘崖から西山地上部の広葉樹を中心とした明るい林に生息しています。囀りは小さいぐぜり調子なので、聞き取るのは大変難しいです。枝に止まり、ぱっちりした目で飛び交う虫を見つけて、素早く飛びついて捕まえます。雄も雌も灰色をしているうえ、キビタキやオオルリの雌とよく似ているので、見分けるには細かな観察が必要です。

5月初め、横に伸びた太い枝の上に、他の木の幹からちぎり取ってきたコケを盛んに運ぶ姿が見られます。やがて、そこには皿状の巣ができ上がり、子育てが始まるのです。



枝上の苔の巣で育雛
(撮影：角屋明美)

クロツグミ・アカハラ (ツグミ科：夏期)



クロツグミ (撮影：角屋明美)

どちらもサクラの便りが聞かれる頃、南の地方からやってきます。標高 1,000m 以下の明るい林で地上をはねながら歩き、ときどき立ち止まって

はミミズや地上性の昆虫などを採餌します。クロツグミの「キコ・キコ、キュコ・キュコ」と大きな声で鳴く囀りはとても美しく、愛鳥家に人気があります。アカハラもクロツグミに似たきれいな声で「キョロン・ツイロン・ツイー」と鳴きます。どちらの囀りも薄暗い早朝や夕方に多く聞くことができます。鳴くとき以外は林内の地上で餌を探して歩いたり、「チー」と鳴きながら地上すれすれを飛んだりして過ごします。クロツグミはかつて飯田市街地にも棲んでいましたが、今では山地の林でしか会えない鳥になってしまいました。それでも、当町の山林ではなんとか数か所でクロツグミを確認できますが、アカハラにいたっては山の寺から吉田山への登山道脇の林内で囀りを確認しただけでした。



アカハラ (撮影：角屋明美)

サンショウクイ (サンショウクイ科：夏期)



梢にとまるサンショウクイ

尾が長い体型や白黒の配色は一見ハクセキレイに似ていますが、水とは関係のない低山の明るい林や人里近くの樹林に棲んでいます。林の上空を「ピリリピリリ」と頻繁に鳴きながら飛ぶのは個体間の縄張りを守るためか配偶関係を強めるためのディスプレイでしょう。横に張り出した枝にコケなどを使って皿形の巣を作ります。



サンショウクイの巣

やぶの中に棲む鳥

ミソサザイ (ミソサザイ科：通年)



巣材を運ぶミソサザイ

地表近くを素早く歩いたり短く飛んだりしながら、木の株元や岩の裏側に潜っては虫を探して暮らす黒褐色をした日本で最も小さい鳥の一種です。それでありながら、春先、谷川の枯木の頂上や岩の上で尾羽を反り返らせて長く力強い声で囀ります。秋から冬の間は、段丘崖や西山地下部の地表近くで姿を見ますが、2月末になると山地上部へ上り始め、やがて、谷や沢沿いの石や倒木がごろごろしている場所に落ち着きます。やがて、崖の裏側や倒木の隙間にコケを使って巣を作りますが、産卵以降の子育ては雌が中心になって行います。雄は別の雌を求めて巣から離れてしまいます。これはこの鳥の繁殖が一夫多妻というシステムで進むことを示す行動です。

センダイムシクイ (ウグイス科：夏期)

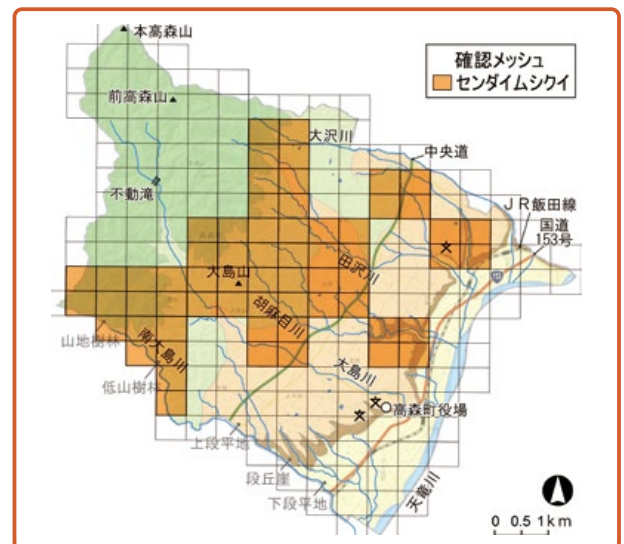


梢で囀るセンダイムシクイ (撮影：角屋明美)

「チヨチヨチヨ・ジュイ」という囀りが「焼酎一杯グイ」と聞こえることで、人々に親しまれてい

る鳥です。背は明るい黄緑色で、腹部は白っぽい色をしています。高森町では、西山地の比較的低い位置の広葉樹林が主な生息場所ですが、段丘崖の樹林にも棲んでいるところがあります。中木や低木の枝をこまめに飛び移りながら、葉の裏側などにいる虫を捕まえます。地上の斜面のくぼみや落ちた枯れ枝が重なった中などに巣を作ります。

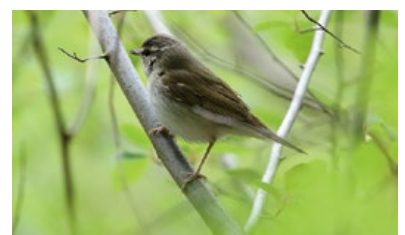
近縁種のエゾムシクイとメボソムシクイも高森町で確認されましたが、姿が似ているので識別は難しいです。ただし、それぞれの囀りはかなり違うので、それを聞くことができれば識別は簡単です。



センダイムシクイの確認メッシュ

エゾムシクイ (ウグイス科：夏期)

「ヒーツーキ・ヒーツーキ」と囀り、センダイムシクイより標高が高いところに棲みます。



エゾムシクイ (撮影：角屋明美)

メボソムシクイ (ウグイス科：夏期)

「ジュリジュリジュリ」と囀ります。高森町では渡りの途中、寄っていただけです。



メボソムシクイ (撮影：角屋明美)

■ ヤブサメ (ウグイス科：夏期)



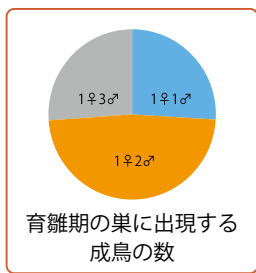
弓矢沢の樹林に出現したヤブサメ

4月の初め、南の地方から渡ってきて10月初めにはまた帰って行く夏鳥です。灌木が発達した林やササが繁茂したやぶなどに好んで棲み、主に地表に近いところを短く飛んだり、歩いたりしながら虫を捕まえて暮らします。「シーシーシー」と虫のような声で鳴きますが、それは小さく非常に高いので、慣れないと聞き取ることがなかなか難しい声です。また、体が手のひらにすっぽり入ってしまうほど小さいうえ、枯れ葉色をしているので観察することも大変な鳥です。

斜面の小さなくぼみに枯れ葉などを集めて巣を作り子育てをしますが、雛が孵った巣につがい以外の雄が出現して、巣の近くで囀ったり次の繁殖に参加したりして繁殖が進みます。この鳥の雌の中には1年に3回産卵する個体があります。



巣から雛の糞を持ち出す親鳥



■ コルリ (ヒタキ科：夏期)

コルリは高森町の西山地の、明るい広葉樹林の背丈の低い木やササが密生した場所に好んで棲んでいます。背は明るい青、腹部は白色で目立つ配色をしたスズメ大の鳥ですが、笹や灌木のやぶに潜る生活が多く、なかなか姿を見せてくれません。

木の下枝や地上で「ヒーチョプチョプチョプ」



コルリ (撮影：角屋明美)

とコマドリに似た声で囀りますが、その前に「ヒッ・ヒッ・ヒッ」という小さな前奏が入るので聞き分けることができます。草木の根元や倒木の下に巣を作って子育てをします。近縁種としてコマドリの生息を確認しています。

■ コマドリ (ツグミ科：夏期)



コマドリ (撮影：角屋明美)

高森町の西山地の稜線近くにはコルリの近縁種のコマドリが生息しています。この鳥は「ヒンカラカラカラ」と馬の嘶きのような調子で鳴きますが、コルリのような前奏はありません。



コルリとコマドリの確認地点



その他の鳥

代表的な冬鳥

ツグミ (ツグミ科：冬期)



リンゴの木にとまるツグミ

落ち葉の季節を迎える頃、北国から群れで渡ってくる冬鳥です。果樹園や集落だけでなく、西山地下部の明るい林などを歩きながら、落ち葉をひっくり返して隠れているミミズや虫を捕まえて食べています。また、熟した柿やリンゴの実も好きなので、牛牧や吉田、新田などの果樹園にはこの鳥がたくさんやってきます。昼間は比較的ルーズな群れで生活していますが、夕方になると「ケケッ・ケケッ」と声を出しながらだんだん集まり、^{ねぐら} 罫目指して集団で飛び去ります。

シロハラ (ツグミ科：冬期)



地面を歩くシロハラ

ツグミの近縁種のシロハラも冬鳥として見るができます。ツグミよりやや大型で、林の中を好みます。用心深く、危険を感じると「チー」と鳴いて、地面すれすれを飛び去ってしまいます。

ジョウビタキ (ツグミ科：冬期)

秋、いち早く北の地域からやってくる冬鳥です。西山地の明るい林にもいますが、人家や農耕地などの果樹や庭木に止まり、「ヒッ・ヒッ」と短い声で鳴いている姿を見たことがある人は多いと思います。地面や木の陰で虫を見つけ、捕まえて暮らしています。冬の間も雌雄に関係なくお互いに縄張りを



ジョウビタキ 雄



ジョウビタキ 雌

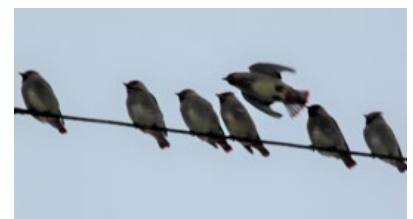
持つので、追いつめ合いをしたり、ガラス窓に写る自分の姿を相手だと思ってガラスに向かって体当たりをすることもしばしば見られます。高森町では今の所冬鳥ですが、最近、八ヶ岳山麓では繁殖が確認され留鳥のなかま入りをしているので、そのうち町内でも繁殖が確認できるようになるかもしれません。

ヒレンジャク (レンジャク科：冬期)



尾羽の先が赤いヒレンジャク

尾羽の先に明るい赤色の帯があることからこの名前が付けました。冬が終わり春の足音が聞こえてくる頃、高森町の柿畑にやってきて、枝に残っている熟した実をついばむ姿を見かけることがあります。この鳥は 100～200 羽の群れで訪れることが多く、電線に 1 列に並ぶ光景が見られることがあります。しかし、この鳥の到来は年によってまちまちで、100 羽前後の群れがいくつも現れることもある年もあれば、1 羽も訪れない年もあります。



電線にとまるヒレンジャクの群れ

キレンジャク (レンジャク科：冬期)

尾羽の先の帯が黄色いレンジャクです。ときどきヒレンジャクの群れの中に数羽含まれていることがあります。

3. 高森町の動物

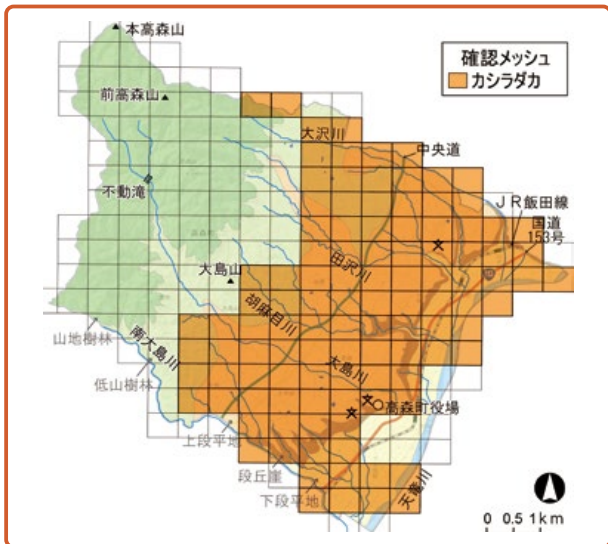
カシラダカ (ホオジロ科：冬期)



カシラダカ
(撮影：
角屋明美)

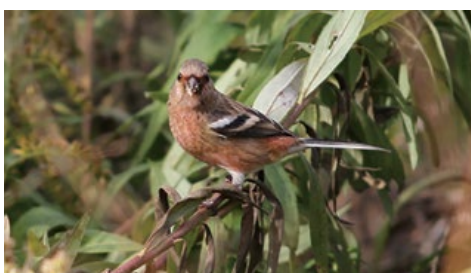
ホオジロに色はよく似ていますが、少し小柄な鳥です。秋から冬、農耕地や林縁部や河川など平地の草地で確認できます。草に止まったり地上を歩いたりしながら、イネ科やタデ科の種子をついばんでいます。数十羽の群れで過ごすことが多く、危険を感じると一斉に飛び立ち、近くの樹木の枝にいったん避難する姿がよく観察されます。

普通、「チツ・チツ」と短い声で鳴きますが、暖かい日には枝先でヒバリに似た声で少し長くさえず囀ることもあります。頭頂部の羽毛が逆立っていることが多いことからこの名前が付けました。



カシラダカの確認メッシュ

ベニマシコ (アトリ科：冬期)

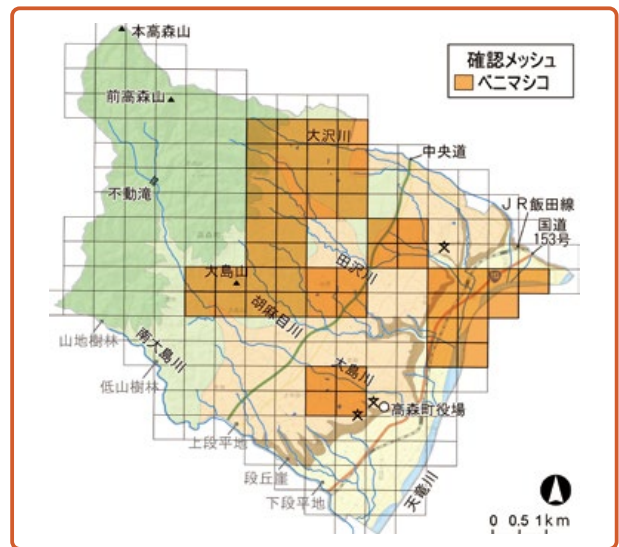


ベニマシコ
雄
(撮影：
角屋明美)



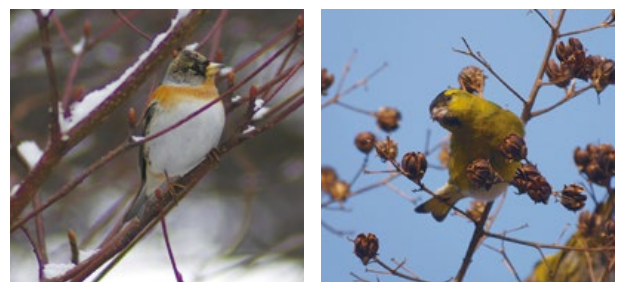
ベニマシコ
雌

枯れたススキ原や林の周りのやぶに棲んでいて、ピンクに近い赤色でホオジロに似た鳥です。「ヒツ・ヒツ」と短い声で鳴きます。



ベニマシコの確認メッシュ

アトリ・マヒワ (アトリ科：冬期)



雪の中のアトリ マヒワ (撮影：角屋明美)

冬、森で「チュイン」と鳴きながら大群でやってきて、大木の枝の間を忙しく飛び回ったり、種子をついばんでいる鳥がいます。それはアトリとマヒワです。アトリは主にシデやハンノキなど広葉樹の種子をついばみ、マヒワはスギやヒノキなど針葉樹の種子をさかんに食べています。どちらも西山地では稜線近くよりも山麓の樹林でよく見かけます。段丘崖の林にもまれに出現します。どちらも年によって飛来する数は違うようです。

山を下りる鳥

高森町で冬期に見られる鳥の中には、北の国からやってくる鳥の他に、夏の間は中央アルプスなどの高山や、前高森山から本高森山までの稜線付近に棲んでいて、冬がやってくる前に低地へ下りてくる種類がいます。

ルリビタキ (ヒタキ科：冬期)



ルリビタキ雄



ルリビタキ雌

夏期は主に標高 1,500m 以上の比較的暗い亜高山帯針葉樹林に棲み繁殖を行います。しかし、高森町の前高森山から本高森山(1,890m)までの稜線は標高 1,500m を越えていますが生息は確認できません。それは、その付近にはこの鳥が好むコケが密生した樹林が少なく、ほとんどが明るいカラマツ植栽林になっていることが原因だと思います。

ところが、秋から冬になると、西山麓や段丘崖の谷筋の日当たりのよい樹林で、その姿を確認できるようになります。木の根元や枯れ枝の隙間にいる虫を探しながら歩いたり、短く飛んだりしています。この時期は雄も雌も1羽ずつで過ごします。

カヤクグリ (イフヒバリ科：冬期)

夏、高山に登ると、ハイマツの枝の中で「チリチリ・・・」と鈴を鳴らすような声でこの鳥が鳴いています。冬になると、西山麓の林縁部にある草と灌木が混在しているやぶに潜り込んで、餌を探している姿を見ることがあります。

体色が地味な濃い茶色で、茂みの中に潜ること

が多いので、鈴を鳴らすような声は聞こえても姿を見ることはなかなか困難な鳥です。

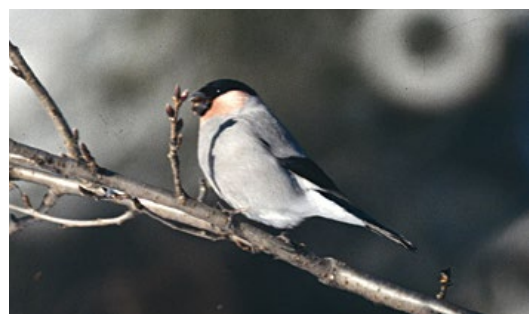


地味な色のカヤクグリ (撮影:角屋明美)



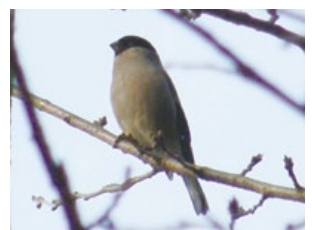
ルリビタキとカヤクグリの確認地点 (冬期)

ウソ (アトリ科：冬期)



ウソ雄

夏、亜高山帯の樹林で口笛を吹くような声で鳴き、のど元のピンクが目立つ高山の鳥です。冬には低山に下りてきて、明るい林で過ごします。



ウソ雌

春の足音が近づいてくると、西山麓や段丘崖などの桜の木にやってきて、花のつぼみをついばむ姿をたびたび見ることがあります。

3. 高森町の動物

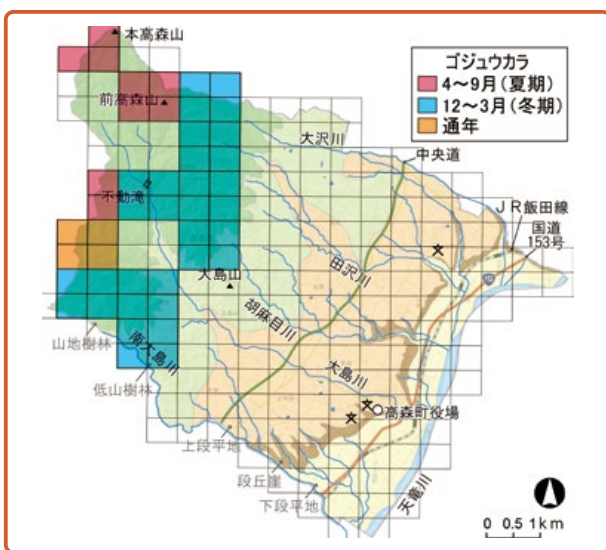
ゴジュウカラ (ゴジュウカラ科：通年・冬期)



幹や枝を上ったり下ったりするゴジュウカラ

シジュウカラのような色の鳥で、樹木の幹や太い枝をキツツキのように上ったり下向きに下りたりしながら、樹皮の裏や枝の割れ目などに隠れている虫を探します。高い枝に止まり「フィ、フィ、フィ」とか「ピョツ、ピョツ、ピョツ」と鋭く短い声で鳴くのもこの鳥の特徴です。

図のように夏は西山地の稜線近くに少数生息していますが、冬には低い山へ下りてきて明るい樹林で過ごします。その時は、他のカラ類に混じって行動することもあります。



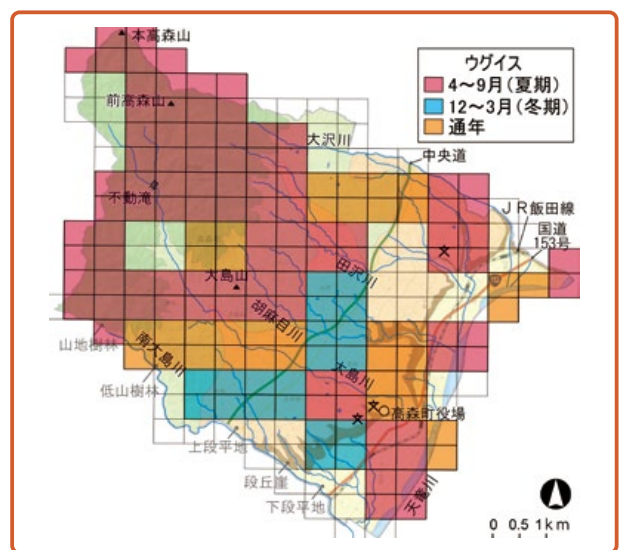
ゴジュウカラの季節別確認メッシュ

ウグイス (ウグイス科：通年・冬期)



実際の色は鶯色より茶っぽい色のウグイス (撮影：水上貴博)

ウグイスは「ホーホケキョ」と囀ることは日本中の誰もが知っていますが、冬はササや灌木の茂みで「チャッチャツ」と鳴くことはあまり知られていません。夏は町中のどこでもやぶが茂っていれば棲みますが、特にササやぶを好みます。図のように、夏は西山地の稜線付近の高い場所にも棲んでいますが、冬には下りてくるようです。庭や公園で、垣根の茂みの中で見られることもあります。



ウグイスの季節別確認メッシュ

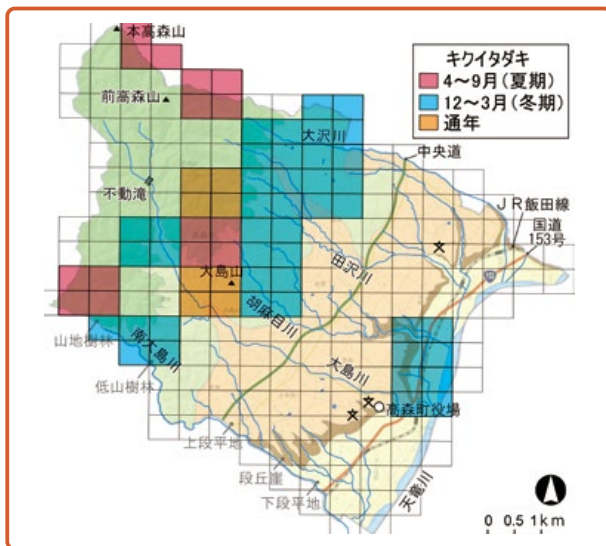
キクイタダキ (キクイタダキ科: 通年・冬期)



冠毛が菊の色のキクイタダキ (撮影: 角屋明美)

我が国で最小の小鳥です。夏は西山地の標高1,000m以上の針葉樹林に棲み、ツガやモミの枝葉の中に潜り込んで餌を探します。巣は針葉樹の枝の先にクモの糸とコケを使ってハンモックのような吊り巣を作り子どもを育てます。

冬になると山を下り、低山の針葉樹林でカラ類と一緒に過ごす個体もいます。



キクイタダキの季節別確認メッシュ

通年ほぼ全域で見られる鳥

ヒヨドリ (ヒヨドリ科: 通年)

今回の調査で出現回数が一番多かったのはこのヒヨドリでした。図のように標高1,500m以上の前高森山から本高森山への稜線周辺を除いたほぼ全域で生息を確認しました。ただし、冬になると高い地域から下りてくる個体もいるようです。この鳥はハトより一回り小さく、地味な色をしています

が、集落や農耕地にも棲んでいて「ピーピー」と鳴き、よく飛び回るので目に付く鳥です。甘い物が好きで、春は桜の花の蜜を食べたり秋はリンゴや木の実をついばんだりします。結果的にはそのことが花の受粉を助けたり種子を遠くへ運んだりすることになり、食べ物が鳥と植物の協力関係によって進化してきた結果だと考えられます。

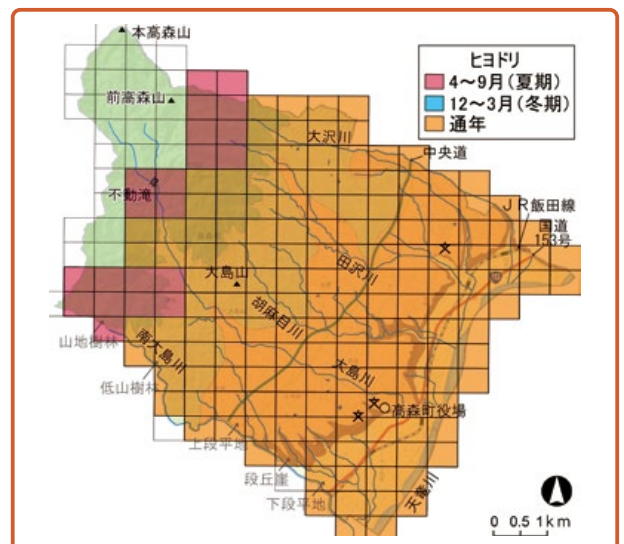


甘いグミの実が大好き

庭木や林の木の枝に作った巣をよく見ると、小枝などに混じってビニールのひもが混じっていることがあります。ここにも私たちの生活に溶け込んでいる様子をうかがうことができます。



庭木の巣で育雛中



ヒヨドリの季節別確認メッシュ

■ **エナガ** (エナガ科：通年)



木の枝を激しく動き回るエナガ (撮影：角屋明美)

天竜川の河畔林から西山地の稜線まで幅広い範囲に生息している鳥です。最も小さい鳥のなかまで尾が長く、小枝につ



巣材を持ってきたエナガ

り下がったり飛び移ったりして忙しく動きながら、葉や小枝に隠れている小さな虫を探します。春先に、枝の付け根にコケをクモの糸で綴ったボール状の巣を作りますが、まだ寒さが残っているので、巣の中へは羽毛をいっぱい運び込みます。

他人の巣に繁殖に失敗したなかまがやってくるので、子育てのお手伝いをするのが知られています。自分の家族だけでなく、隣の家族とも仲がよく、子育てが終わるとお互いに集まって、10～20羽の群れで過ごします。冬の庭木や果樹に「ジュリッ・ジュリッ」と賑やかに鳴きながら集団でやってくるので、群れが来たことに気づくことができます。

■ **キジバト** (ハト科：通年)

この鳥が畑を歩きながらマメや草の実を拾う姿や、上空を一直線で飛んで行く姿を目にすることは珍しくありません。また、電線や木の枝に止まって「デデッポー・デデッポー」と鳴く声を聞いたこともあるでしょう。このように私たちの周りにはいる鳥ですが、天竜川や西山地の林にも棲んでい

ます。この鳥は他の鳥と違って巣の周り以外は共有できるので、数羽が並んで餌を拾っていても争いは起きません。



電線のキジバト

巣は木の枝に小枝を無造作に並べるだけなので、今にも卵が落ちてしまうのではないかと思うような粗末な物です。しかし、雄と雌が交代しながら常に巣を守っているためその心配はいりません。また、この鳥は種や実など雛にとって消化の悪い物が主食です。そのため、親は餌をいったん飲み込み、体内でつぶして液体にし、それを雛の口の中に流し込んでやるのです。

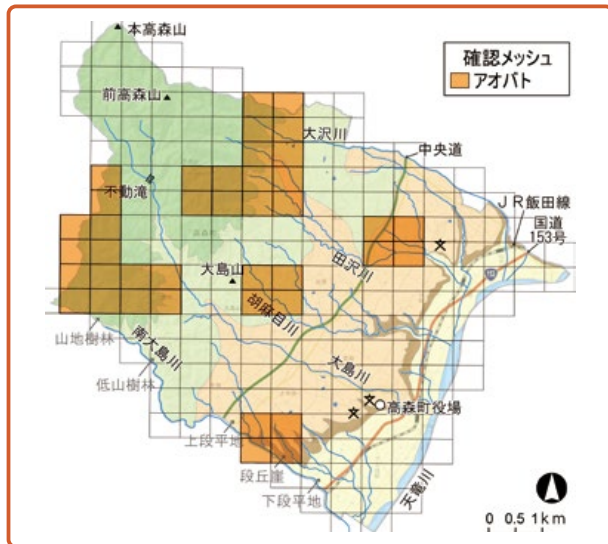


キウイの枝の中の巣

■ **アオバト** (ハト科：夏期)

キジバトと同じなかまの黄緑色をしたハトです。この鳥は樹林に棲んでいて、畑や開かれた場所には出てきません。木の高い枝で「アオーアオー」と鳴く声や、数羽で林の上空を飛ぶ姿により生息の確認はできますが、高所へとまるため観察がしづらく、詳しいことはわかっていません。また、この鳥は海で塩水を飲んだり、飯田の漬物工場の周りで塩水が浸みた土を食べたりといった不思議な行動をします。巣についても、県内はもちろん国内でもほとんど見つからないという、いろいろと秘密に満ちた鳥です。

高森町でたびたび声を聞いたのは、黒沢川兩岸の樹林だったので、巣があったのかもしれませんが。高森町では夏期の確認だけでしたが、図鑑によれば通年生息の可能性もあるようです。



アオバトの確認メッシュ

カラスのなかま

ハシボソガラス (カラス科：通年)



くちばしが細いハシボソガラス

天龍川から、西山地の稜線まで、町の全域に生息しています。果物や小動物など、さまざまなものを食べています。小鳥の雛や卵を襲ったり、ゴミの中から食べ物をあさったりします。クルミの実を拾って舞い上がり、それを道路に落として走ってきた車に踏ませて固い殻を割るという知恵も持っています。

高木の枝に小枝を使って巣を作り子どもを育てますが、雌が巣に入っている時に、近くの枝で見守っている雄がいる光景はほほえましいものです。

ハシブトガラス (カラス科：通年)



市街地に多いハシブトガラス

くちばしが太いことからこの名前が付けました。ハシボソガラスと同じような場所に混じって生活していますが、高森町ではその数はごくわずかです。平地の集落付近で過ごすことが多く、山地の樹林にはほとんど入って行きません。町内でも繁殖をしていると考えられますが、まだ確認したことはありません。

餌場や^{ねぐら}つり前の集合所では、近づいたハシボソガラスを追うような行動は見られますが、2種の間にはっきりした棲み分けはみられません。

カケス (カラス科：通年)

カラスのなかまですが、淡褐色の中に青や白い部分があるハトぐらいの大きさの鳥です。段丘崖と西山地の樹林に棲み、ときどき「ジャー



カケス (撮影：角屋明美)

ジャー」とか、タカ類の声を真似た「ピー」という声で鳴くことがあります。一般的に鳥は両親だけ子育てをすることが多いのですが、カケスでは両親の巣に前年の子どもなどが現れて、子育てを手伝う(ヘルパー)ことが知られています。この鳥が移動する時に、ほとんどの場合数羽で飛ぶことが多いのはこのことに関係があるのでしょう。

冬が近づくとコナラの木に通い、ドングリの実をくわえては運び、近くの木の根元や地面のくぼみに隠すという行動が見られます。これは冬の食料を準備しておく貯食行動と言われています。

オナガ (カラス科：一時期のみ)



オナガ

この鳥は今から50年ほど前に、中信地区から下伊那地方に進出してきました。その後、各地に広がって生息を始めました。高森町でもいくつかの群れが棲み、上市田の果樹園で繁殖も確認しました。しかし、最近になって下伊那地方全体の生息数が減り始め、今ではごく限られた地区に棲むだけとなりました。高森町では2019(令和元)年8月に山吹の上段平地で1~2羽、下市田の坂牧城址付近で8羽を確認した(山田拓 私信)以外、その姿を見ることはできていません。



オナガの伊那谷への進出

出典：中央アルプスと伊那谷の自然 (1993)

タカのなかま

高森町で生息が確認できたタカのなかまは、イヌワシ・クマタカ・ハチクマ・オオタカ・ハイタカ・チョウゲンボウ・ノスリ・トビの8種類でした。春から夏の繁殖期のみ確認はハチクマだけで、それ以外は非繁殖期も観察できました。また、巣を確認できたのはチョウゲンボウとハチクマですが、幼鳥だけを確認したイヌワシ以外は繁殖していると思われます。

- ・クマタカは吉田山周辺で繁殖していた模様
- ・ハチクマは5月に渡来、新田より上段の山林で繁殖例あり
- ・オオタカは大島山周辺で繁殖の可能性があった
- ・ノスリは数多く出現したので、数つがい繁殖している模様
- ・チョウゲンボウは3か所で巣を発見
(万年橋、アピタ付近の建物、間ヶ沢大橋)
- ・ハイタカは胡麻目川上流で餌運びを確認



クマタカ (撮影：角屋明美)



ハチクマ



ノスリ



オオタカの雛



チョウゲンボウ



ハイタカ (撮影: 植松永至)



イヌワシ・クマタカの確認地点



ハチクマ・ノスリの確認地点



ハイタカ・チョウゲンボウ・オオタカの確認地点

3. 高森町の動物

夜行性の鳥

鳥の中には夜間に行動する種類がいます。高森町ではフクロウ・ヨタカ・トラツグミの3種類の生息が確認されましたが、以前、確認したことがあるアオバズクの生息は確認できませんでした。

フクロウ (フクロウ科: 通年)



昼間巣を見張る親鳥

音声機器を使ってフクロウの声を流し、反応する声を聞くことで生息を確認しました(コールバック法)。

段丘崖の林や社寺林、西山麓の樹林には、かなり高密度で生息していることがわかりました。



フクロウの確認地点

大丸山公園周辺の林からは、年間通して「ゴロスケホッホホッホホッホ」という声が聞こえてきます。きっと近くの大木の穴で子育てをしていると思います。



巣箱から顔を出した雛

ヨタカ (ヨタカ科: 夏期)

この鳥も、フクロウと同じコールバック法で調べたところ、3か所で生息を確認できました。中には、声を流している機器に向かって飛んでくる個体もいました。

他の地方ではスキー場や牧場などの草原に棲んでいます。高森町では西山地の伐採地に棲んでいます。夜中に上空を「キョッキョッキョッキョ」と速いテンポで鳴きながら飛びまわり、大きな口へ入ってくる虫を食べるそうです。地上のくぼみなどに子育てのための巣を作りますが、偶然に見つかることはあっても、探すことは困難です。

昼間は近くの林の枝に縦に止まって休んでいますが、その姿は木のこぶにしか見えないので、見つけることはほとんど不可能です。



ヨタカの確認地点

●トラツグミ (ツグミ科：通年)

夜中や早朝のまだ暗い時に、林の方から「ピョーピョー」と寂しげな声で鳴くので、気味悪く思われているのはこの鳥です。体全体に黄色と黒色が縞になっているのでこの名前が付きました。

高森町では西山麓の林に生息し、地面を歩きながら、落ち葉をひっくり返してミミズなどの虫を食べて暮らしています。冬に吉田山登山道で出会いましたが、この時期になるとほとんど声を出さないで、会えたのは偶然の出来事でした。



トラツグミの確認地点

■ カッコウのなかま [托卵鳥]

違う種類の鳥の巣に自分の卵を産みこみ、その親（宿主）に子育てのすべてをやらせるという繁殖戦略を発達させてきた鳥がいます。それらは托卵鳥と呼ばれ、我が国では4種類が知られていますが、高森町にもそのすべてが春にやってくる夏鳥として生息しています。

■ カッコウ (カッコウ科：夏期)

うららかな春を迎えた新田の果樹園では、この鳥が電線に止まり、気持ちよさそうに「カッコウ・カッコウ」と尾羽を上げ体をゆすりながら鳴いている姿を見ることができます。鳩ぐらいの大きさですが、こちらの方がスマートな体格です。この鳥はモズの巣に卵を産み付けているようです。



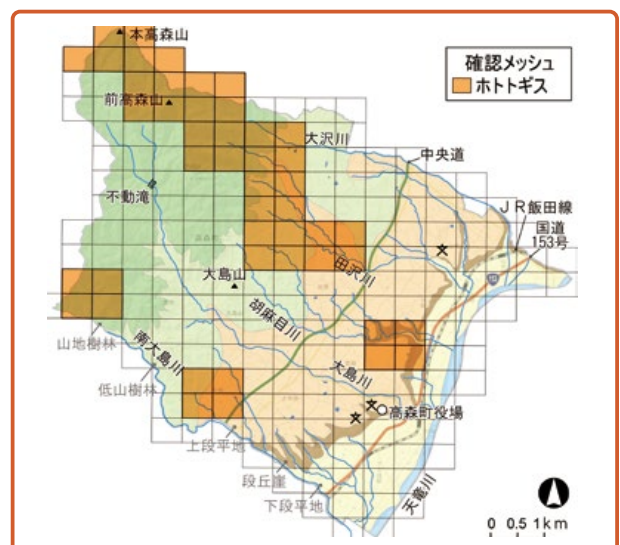
■ ホトトギス (カッコウ科：夏期)

薄暗い西山地の林から「キョッキョキョキョキョキョキョ」（特許許可局）とせわしく鳴きながら飛んでいる鳥はこのホトトギスです。この鳥はチョコレート色の卵を産むので、同じ色の卵を産むウグイスに卵を預けます。そのため、この鳥もウグイスが棲むササやぶが広がる林に棲み、木の頂上に止まってウグイスが巣を留守にする時を狙っています。

カッコウと同じようにほかの鳥があまり好まない毛虫を食べることが知られています。



宿主のウグイス



ホトトギスの確認メッシュ

ツツドリ (カッコウ科: 夏期)



梢で鳴くツツドリ

この鳥は筒を吹くように「ホッホッホッ」と鳴くのでこの名前が付きました。本州のツツドリは白い卵を産み、似た色の



宿主のヤブサメ

卵を産むヤブサメやセンダイムシクイなど林の中にいる鳥に托卵をします。そのためでしょうか、ツツドリの出現場所がヤブサメのそれとよく似ています。

ところが、北海道にはチョコレート色の卵を産み、ウグイスに托す個体もいるそうです。

ジュウイチ (カッコウ科: 夏期)

この鳥の鳴き声が「ジュウイチ・ジュウイチ」と聞こえることからこの名が付きました。卵の色は淡青色をしており、宿主の

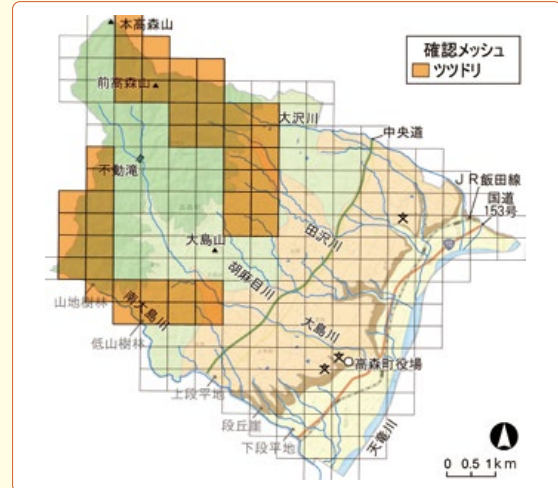


宿主のコルリ (撮影: 角屋明美)

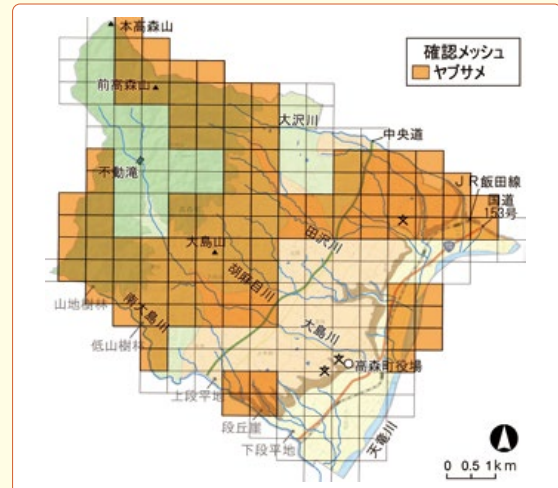
主のコルリのその色とよく似ています。したがって、コルリの生息域である標高 1,000m 以上の山地にこの鳥も生息しています。

コラム ツツドリとヤブサメの関係

托卵する関係上、図のように2種の分布状況は似ています。



ツツドリの確認メッシュ



ヤブサメの確認メッシュ



ジュウイチの確認メッシュ

希少な鳥

高森町にはヒヨドリやシジュウカラのようによく目にする鳥とは異なり、まれにしか出現しない鳥や数が少ない鳥がいます。そんな鳥の中には、絶滅が心配される鳥として、国や県で絶滅危惧種に指定され、保護の対象になっている種類もいます。

ミゾゴイ(サギ科：夏期)【絶滅危惧Ⅱ類：環境省】



ミゾゴイの育雛

2018(平成30)年4月21日の夜、山吹の寺沢川を少し上ったゲンジボタルの発生で知られている場所で、この鳥の出現を待ちま



生息地の環境

した。すると、19時56分に「ポーッ・ポーッポーッ」と低い声で鳴き始めたのです。それは20時20分までの間に10回ほど聞こえました。その後も数日間この声は聞こえましたが、5月に入るとその声はひたりと聞こえなくなりました。

姿を見たくて、後日の昼間にその場所へ出かけてみましたが、見つけることはできませんでした。そこは、中央に流れる寺沢川に沿って果樹園や水田が細長く並び、その周りに密生したスギ林と鬱蒼とした竹林が広がる谷地となっています。左岸側の傾斜地にはわさび畑とクルミ畑があり、そこの地面はわき水で湿っていました。この場所はミゾゴイが好物のサワガニやカエルなどを探したり、危険から身を隠したりするのに適した環境であると言えます。

その翌年、同じ時期に寺沢川に出かけてみたところ、2日間はその声が聞こえましたが、その後ぷつりと聞こえなくなり、どこかへ行ってしまったものと思われます。2018(平成30)年5月にも、中学校横の唐沢洞の樹林で鳴き声を聞きましたが、観察をしているうちに上流へ去ってしまいました。移動中だったと考えられます。同じような環境のある黒沢川や銚子ヶ洞、江戸ヶ沢、胡麻目川へ出かけてみましたが、生息を確認することはできませんでした。

この鳥は全国でも個体数が激減しているということで、環境省では絶滅危惧Ⅱ類に指定して保護に努めていくことになっています。高森町でもこの貴重な鳥を温かく見守っていききたいものです。



ミゾゴイ(撮影：橋都正)

クロジ(ホオジロ科：夏期)

たいていの鳥類図鑑には、この鳥の説明として「繁殖期は中部以北の林床にササの多い樹林に局所的に生息し、冬季は中部以南の平地の暗い林で過ごす」と記載されています。この文から、中部地方に位置する高森町での生息は、繁殖期、非繁殖期のどちらでも当てはまることになります。



クロジの生息環境(前高森山山頂付近)

3. 高森町の動物

実際に調べてみると、夏期にこの鳥が棲んでいることがわかりました。図のように、本高森山登山道脇のササが発達したカラマツ林で「フィーチヨチヨ」という声が聞こえてきたのです。高森町だけでなく、松川町の小八郎岳、駒ヶ根市の池山でも同じような林で生息を確認しました。このことから、中央アルプス山麓の同じような林には、繁殖期に安定して生息していると言えそうです。粘り強く観察して巣を見つけることができれば、図鑑の記載を変えてもらいたいと考えています。



ヒバリの確認地点



クロジの確認地点

ヒバリ (ヒバリ科：通年)

「ピーチクピーチク」と長い囀り^{さえず}りをしながら、上空へ上がっていく姿は、この鳥の象徴的な姿です。

昔は麦畑が多く、この鳥の姿や巣を見たものですが、近年は麦畑も減り、田植えも早くなってしまったので激減してしまいました。それでも、下市田工場団地の駐車場の草地や吉田の草刈り前の畑では、毎年姿を見ることができます。繁殖していることが十分考えられますが、ずっと昔、下市田の駐車場で巣を見つけて以来、繁殖の確認ができていません。



巣と卵

アオジ (ホオジロ科：通年)

冬、川の草の茂った場所や、土手のススキやかんぼく灌木が密生した中で「チツ・チツ」と鳴きながら暮らすので、なかなか見つけられない鳥です。春から夏には局地的に生息していますが、数は非常に少ないと考えられます。



アオジ (撮影：角屋明美)

サンコウチョウ (カササギヒタキ科：夏期)

水色のアイリング、青紫の羽、30cmもある雄の尾羽、「月・日・星ツキヒーホシホイホイホイ」と聞こえる声、どれをとっても魅力のある鳥です。それは英名が Japanese Paradise flycatcher (日本に棲むヒタキ科の極楽鳥) と付いたのうなずけます。

高森町では図のように6か所で出現しましたが、つがい数は4~5だと思えます。巣は見つかっていませんが、繁殖していることは間違いないでしょう。出現した雄の中で、尾羽が長い個体は1羽だけで、



子育て中の両親 (塩尻市 撮影:片倉正行)

あとの雄はすべて短い尾羽の個体でした。

近年、環境の変化や捕獲などによって生息数が激減しているために、県では「絶滅危惧Ⅱ類」に指定して、保護を呼び掛けています。



サンコウチョウの確認地点

その他の希少種

3年間実施した調査でも、まれにしか出現を確認できなかった鳥がいます。これらは数が少ないことも考えられますが、観察しづらい場所にいたり、行動が目立たなかったりすることも関係しているのでしょう。

ヤマシギ (シギ科: 冬期)

2017 (平成 29) 年 12 月、19 時頃に山吹北林のクリ畑の地面で採食中を観察しました (松島高根ら 私信)。

イスカ (アトリ科: 冬期)

2018 (平成 30) 年 1 ~ 4 月に吉田山と牛牧山登山道のアカマツ林で松ぼっくりをついばんでいる約 20 羽の群れを観察しました。

タヒバリ (セキレイ科: 冬期)

冬、下市田工業団地前の天竜川分流の岸辺に出現しました。



タヒバリ

ミヤマホオジロ (ホオジロ科: 冬期)

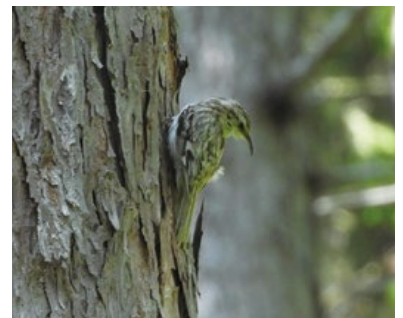
2018 年 3 月、吉田山登山道のやぶで数羽で移動する群れを見ました。



ミヤマホオジロ (撮影:角屋明美)

キバシリ (キバシリ科: 通年)

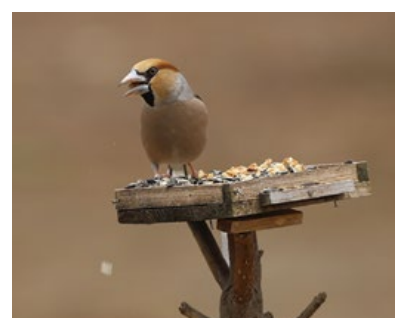
西山地の稜線近くの樹林に棲んでいます。冬はカラ類の群れに入っていることもあります。



キバシリ

シメ (アトリ科: 冬期)

2018 年 2 月、吉田の大島川横の高木の枝に止まっていました。餌台にも来る鳥です。



餌台のシメ (撮影:久保和枝)

3. 高森町の動物

外国から来た鳥

最近「外来種」という言葉をよく聞きます。樹木では「ニセアカシア」、魚では「ブラックバス」などがよく知られていますが、鳥にもいるのです。それは「ソウシチョウ」と「ガビチョウ」で、高森町でも確認されています。

ソウシチョウ (チメドリ科：通年)



林の中で美しい声で鳴くソウシチョウ

かつては、写真のように姿が美しくきれいな声で鳴く鳥だということで、中国から輸入して小鳥屋で売られていました。ところが、何らかの理由により、この鳥が野外でも見られるようになりました。

普通なら新しく入ってもその個体が死ねばその種はいなくなります。この鳥は生き延びたうえ、繁殖を繰り返して、個体数を加速度的に増やしました。それに伴って国内の分布域はどんどん広がりました。最初は茨城の



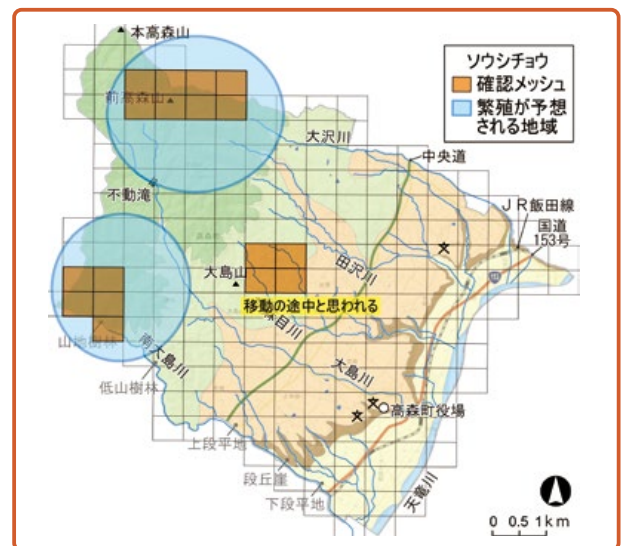
中央アルプス山麓におけるソウシチョウの生息状況

筑波山や九州の九重連山、神戸の六甲山に生息しているといわれていましたが、いつの間にか東の地域にも広がり、今では東北地方の南部より西の地方に生息しています。

中央アルプスの東側山麓では、駒ヶ根市以南の標高 1,000m 以上の山地に分布していますが、宮田高原より北では確認できていません。この鳥は、繁殖期には標高 1,000m 以上の広葉樹林やカラマツ林に棲んでいます。中でも林床にササが密生する明るい林を好むようです。

冬になると海拔を下げ、林縁部や崖に発達したササや竹のやぶで群れて生活します。高森町の場合、繁殖期には図のように 2 つの地域で数つがい繁殖していると考えられます。

心配なのはこの鳥が進入したことによって、今までここに棲んでいた鳥たちへの影響があるのではないかという問題です。早くから棲み始めた筑波山では、そこで繁殖する鳥の中では一番多くなってしまったそうです。また、昔、ハワイでこの鳥を持ち込んだところ、他種が極端に衰退してしまったという報告があるように影響は大きいようです。日本の場合は生活場所も巣の場所も共通しているウグイスへの影響が大きいのではないかと心配しています。国ではこの鳥を特定外来生物に指定して、増えるのを防ごうとしています。何ら打つ手はないようです。



ソウシチョウの確認メッシュ

ガビチョウ (チメドリ科：通年)



大きな声で鳴くガビチョウ

このガビチョウも中国や東南アジア原産の外来種です。ヒヨドリに似た大きさで、暗茶色をしていますが、目の周辺の白い模様が目立ちます。

林の周りのササや、灌木が密生した場所の地上での生活が多いので姿はあまり見えません。ソウシチョウに似てはいますが、濁った大声でよく鳴くので、識別は簡単にできます。

高森町では2019（令和元）年7月に、大丸山公園で声を聞いただけの確認でした。しかし、南アルプスのすそ野には高密度で生息している場所があり、広がりつつあるので、今後注意していきたい鳥です。現在、関東地方をはじめ県内の佐久地方でも高密度で生息しています。この鳥はソウシチョウとともに特定外来生物に指定されており、分布拡大を防ごうとしています。ここまで広がってしまうと難しいかもしれません。

集団で眠る鳥

鳥はどこでどのように眠るかということは、暗いので観察が難しいために、あまりよく分かっていません。しかし、集団で集まって眠る（集団^{ねぐら}）という社会行動を発達させてきた種については、観察しやすいこともあり、その行動や仕組みが少しずつわかってきました。それは種によっても時期によっても異なります。

ムクドリの集団^{ねぐら}塹

繁殖期のムクドリは、人家の屋根などに巣を作り子育てを行う関係から、夜、雌は巣の中で卵や雛と眠り、雄は近くの木で単独で寝ていると考えられます。やがて、雛が巣立つと、親と雛は昼も夜も一緒にエサを探したり、眠ったりします。巣立ちから約1か月ほど過ぎると、昼間は近所のいくつかの家族が集まって行動を共にし、夜もそのグループで近くの竹やぶで眠るようになります（夏塹）。



吉田地区の小さな集合所と塹（約200羽）



秋の塹

秋になると、昼間はグループで過ごしていますが、夜になると地域に棲むいくつかのグループが集まってより大きな集団で眠るようになります（秋塹）。さらに季節が進むと、集まる群れの範囲が地区から町村レベルに広がり、最後には飯田以北の下伊那全域から集まって眠るような大きな塹になります（冬塹）。2019（平成31）年2月に確認

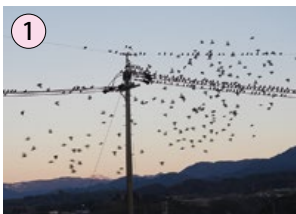
3. 高森町の動物

した冬時は、豊丘村の天竜川河川内に繁茂したヤダケ林でした(図の⑤)。そこにはおよそ3,000羽のムクドリが集まっていました。しかし、翌年の冬にはその時は解消していたので、ムクドリの場合はカラスやトビと比べると年をまたいでの執着はないようです。

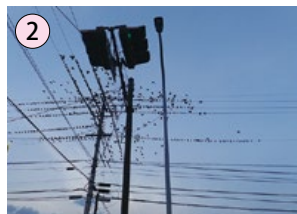
こうして、夜には時に集まったムクドリたちも朝になると、またそれぞれのグループの生活場所へ戻っていきます。



ムクドリの集団囀への集合パターン(模式図 2019)



第1集合所
(高森町下市田の電線)



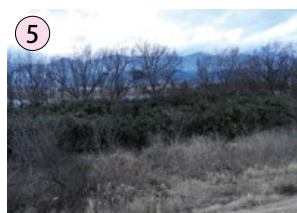
第1集合所
(高森町山吹の電線)



第2集合所(喬木村の電線)



囀りする集団(豊丘村の囀上空)



集団囀場所(天竜川・豊丘村)

カラスの集団囀

カラス(ハシボソガラス・ハシブトガラス)もムクドリと同じように集団囀で寝ます。カラスの場合は、春から夏の繁殖期にも、つがいになれなかった個体や若鳥たちが小さな群れを作って寝ます。やがて、繁殖が終わると、繁殖を終えた成鳥や巣立った雛たちが加わり、少し大きな囀になります(夏囀)。その後季節が進むにつれて、囀の規模はだんだんと大きくなっていきます。

2020(令和2)年1~2月の調査で下伊那中北部には松川町古町地籍(古町囀)と飯田市上郷の見晴山(見晴囀)と飯田市立石(立石囀)の3か所に1,500羽前後の大きな囀があることが分かりました。それぞれの囀の位置とおよその集合の様子は、図に示した通りです。この地域にはこれ以外の囀は発見できませんでした。



下伊那中北部のカラスの集団囀(2020年2月現在)

では、高森町のカラスはどの囀に行くのでしょうか。観察した様子では、古町囀へ行く個体と見晴囀へ向かう個体がいることがわかりました。その境界は吉田から大島山付近と思われるのですが、直線的でなく複雑に入り組んでいるようです。しか

も、見晴峠へ向かう個体には、上郷別府の集合所を経由する個体（または小集団）や、直接見晴峠へ入る個体（または小集団）もいるようです。カラスは町単位で同じように動くのではなく、家族や近くのなかまがそれぞれの行動をしているのだらうと思われます。上郷別府の天竜川と周辺の水田にある集合所へは、高森町の個体だけでなく、喬木村、下久堅、松尾方面から集まってきた個体が、河原や近くの田んぼに集まり、カーカー鳴いたり、追いかかけ合ったりしています。そこに集まっているのは、ほとんどがハシボソガラスで、わずかにハシブトガラスも混ざっています。

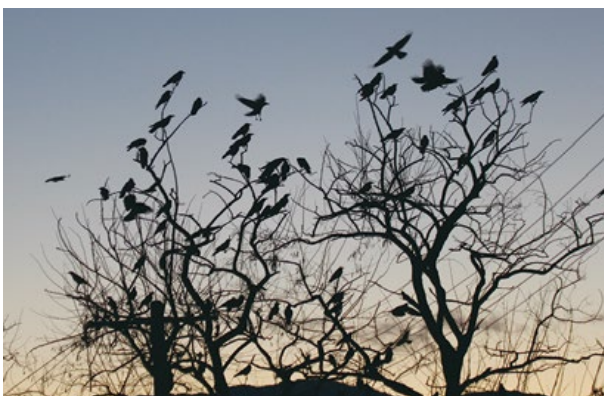
やがて夕闇が迫ってくると、カラスたちはいくつかの群れに分かれて、順々に見晴峠に向かいます。峠に到着したカラスたちは、しばらくの間鳴いたりぐるぐる飛び回ったりした後、それぞれが枝に止まって静かになります。その頃には飯田市街地の夜景が輝き始めています。



峠入り前に送電線に集合（古町峠）



飯田市上郷別府の集合所



飯田市見晴峠（2020年1月）

ハクセキレイ・セグロセキレイの集団ねぐら塙

ハクセキレイは秋から冬には、数十羽から数百羽が集まって寝ます（集団塙）。それは他の鳥のように林や草原ではなく、人や車の往来が激しい市街地の構造物や街路樹の場合がほとんどです。普通、このような場所は危険だと考えますが、実は天敵が近寄ってこないうえ、灯りがあったり風を避けられたりして暖かいのではないかと考えられます。鳥たちも人間生活をうまく利用しているのです。



広告塔で集団で寝るハクセキレイ

一方セグロセキレイはハクセキレイのような大きな群れではなく、十数羽が集まって背丈の高い草原で寝ることがよく見られます。同じなかまのキセキレイはほとんど単独で眠るようです。

トビの集団ねぐら塙

トビも集団で寝ますが、一斉に集まってくるというより、それぞれがのらりくらりと集まってきて塙に入ります。高森のトビは天竜川に沿って上空を南下し、弁天橋東南側に広がる樹林の塙へ集まって寝ています。



トビ

3. 高森町の動物

● 目録

科名	確認種		確認情報 (年・月 / メッシュ)	備考
	和名	学名		
カイツブリ	カイツブリ	<i>Podiceps ruficollis</i>	(2017.2/7B 2018.1/9F 2018.3/8D)	
ウ	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	(2017.5/7B /10 F 2018.6/9F/8C 他)	
サギ	ミゾゴイ	<i>Gorsakius goisagi</i>	(2018.4/8G 2019.4/8G 2018.5/6D)	RL (環 VU/ 県 EN) 調査以前下市田民家に幼鳥出現
	ダイサギ	<i>Egretta alba</i>	(2018.1/7C 2018.2/9G 2019..1/8E 他)	
	コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	(2018.2/8D)	
	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	(2018.1/4F 2018.5/5C 2019.1/8F 他)	
カモ	マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	(2018.1/10F 2018.2/5D 2019.1/8G 他)	
	カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i>	(2017.7/8E 2018.1/9F 2018.5/5C 2019.2/5D 他)	
	コガモ	<i>Anas crecca</i>	(2018.1/9F 2018.2/6D 2019.35I 他)	
	オカヨシガモ	<i>Anas strepera</i>	(2018.1/8C 2018.2/5D 2019.18G 他)	
	ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>	(2019.1/5D 2020.1/6D)	
	ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>	(2018.1/8C)	天竜川市田港で確認
	キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>	(2018.1/8C)	天竜川市田港で確認
	ミコアイサ	<i>Mergellus albellus</i>	(2020.1/5D)	間ヶ沢堤 メス1羽
	カワアイサ	<i>Mergus merganser</i>	(2018.1/9F 2018.3/7B/8C/8E 他)	
ミサゴ	ミサゴ	<i>Pandionh haliaetus</i>	(2018.8/8D)	RL (環 NT/ 県 EN) 天竜川明神橋上空1羽飛翔
タカ	ハチクマ	<i>Pernis apivorus</i>	(2017.5/4F 2017.6/6H 2018.9/6D 2019.7/8G 他)	RL (環 NT/ 県 VU)
	トビ	<i>Milvus migrans</i>	(2017.5/6E 2018.2/8E 2019.4/7D 他)	
	オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	(2019.5/2G 2017.5/4F 2018.4/5E 他)	RL (環 NT/ 県 VU)
	ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	(2019.1/7C)	天竜川上空を豊丘方面へ飛翔1羽
	ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	(2018.4/7I/5E 2018.9/6D 2019.1/8G 他)	RL (環 NT/ 県 VU) 吉田段丘崖上空で餌運び
	ノスリ	<i>Buteo buteo</i>	(2017.5/6D 2018.4/4E 2019.5/3F 他)	
	クマタカ	<i>Spizaetus nipalensis</i>	(2017.6/3G 2017.7/8C 2018.4/4I 2019.2/5F 他)	RL (環 EN/ 県 EN)
	イヌワシ	<i>Aquila chrysaetos</i>	(2017.5/2K)	RL (環 EN/ 県 CR) 本高森山上空若鳥1羽浅海飛翔
ハヤブサ	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i>	(2017.7/8C 2018.1/7H 2018.4/10G 2019.11/8 他)	万年橋、間ヶ沢大橋、上平建造物で営巣
キジ	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica</i>	(2017.5/5G 2018.5/8H 2019..5/3F 他)	外来種
	ヤマドリ	<i>Phasianus soemmerringii</i>	(2017.6/2E 2018.3/5J 2019.4/4G 他)	
	キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	(2017.6/7B 2018.1/9F/7B 2019.2/7F 他)	
クイナ	オオバン	<i>Fulica atra</i>	(2019.1/5D)	間ヶ沢堤で休息
チドリ	コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	(2018.7/7B)	
	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	(2017.7/8D 2018.1/8C 2018.6/7B 他)	
シギ	イソシギ	<i>Tringa hypoleucos</i>	(2017.7/9F 2018.6/9F/8C 他)	
	ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	(2017.12/7F)	北林地籍道路を1羽歩行
	タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	(2018.2/7B)	
ハト	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	(2017.7/9F 2018.5/5C 2018.14F 他)	
	アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>	(2017.6/7G 2018.5/5C 2018.5/J 2019.5/2F 他)	
カッコウ	ジュウイチ	<i>Cuculus fugax</i>	(2017.5/4F 2019.5/2F 2018.7/5J 他)	
	カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	(2018.5/8H 2018.6/4D/6D 他)	
	ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>	(2018.5/2F 2018.7/3K 2017.5/4I 他)	
	ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	(2017.5/7E/5I 2018.7/3J/4J 2019.5/2F 他)	
フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	(2017.6/5C/4E 2018.6/7E 2019.4/6D 他)	
ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	(2017.5/5I/4G/5H)	
アマツバメ	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>	(2018.5/5C)	
カワセミ	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	(2017..68F 2018.11/6D 2019.1/8E 他)	

科名	確認種		確認情報 (年.月/メッシュ)	備考
	和名	学名		
キツツキ	アオゲラ	<i>Picus awokera</i>	(2017.5/10G 2018.4/2F 2018.5/7G 2018.7/5J 他)	
	アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	(2017.6/3E 2018.1/5I 2019.5/2G 他)	
	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	(2017.7/9F 2018.5/4I 2018.1/6H 2019.5/2G 他)	
ヒバリ	ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	(2017.6/7H 2017.7/8F 2018.6/7B 他)	
ツバメ	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	(2017.5/4F 2017.7/10F/7C 2018.5/8G 他)	
	イワツバメ	<i>Delichon urbica</i>	(2017.5/7D 2017.7/10F 2018.6/9F 他)	
セキレイ	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	(2017.6/4C/7H 2018.1/8F 2018.5/5C 他)	
	ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	(2017.5/10G 2018.15E 2018.6/7B 2019.4/6D 他)	
	セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	(2017.7/9F 2018.1/7B 2018.5/6D 他)	
	ピンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	(2018.1/7B 2018.3/4H/3E 他)	
	タヒバリ	<i>Anthus spinoletta</i>	(2019.2/7B)	下市田工場団地前天竜川分流で1羽
サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	(2017.6/4D 2019.4/6D 2018.5/8G 他)	RL (環 VU/ 県 N)
ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	(2017.5/6D 2018.5/8G/3E 2018.1/4F 他)	
モズ	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	(2017.7/9F 2018.3/4D 2018.66G 2019.47D 他)	
レンジャク	キレンジャク	<i>Bombycilla garrulus</i>	(2018.4/4I)	吉田山頂付近 3羽 ヒレンジャクいない
	ヒレンジャク	<i>Bombycilla japonica</i>	(2018.1/7G 2018.2/5D 2018.4/7I 他)	
カワガラス	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>	(2017.5/5E 2018.1/8F/10F 2019.4/5C 他)	大島川・南大島川堰堤で営巣
ミソサザイ	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	(2017.5/3H 2018.3/4F 2018.7/4I 2019.2/3D 他)	
イワヒバリ	カヤクグリ	<i>Prunella rubida</i>	(2018.1/4F 2018.2/3D 2019.1/7H 他)	
ヒタキ	コマドリ	<i>Erithacus akahige</i>	(2018.72K/3J/4J 2019.5/2H/2G 他)	
	コルリ	<i>Erithacus cyane</i>	(2017.5/5I 2018.7/4I 2019.5/3E/2F/2H 他)	
	ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	(2018.1/6G 2018.2/9G 2018.4/4H 2019.2/5F 他)	
	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureoreus</i>	(2018.14E 2018.4/6H 2019.1/7F 2019.2/6C 他)	
	トラツグミ	<i>Turdus dauma</i>	(2017.5/2E 2018.2/5G 2018.3/4H 2018.5/4I 他)	
	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	(2017.6/6H 2018.5/4G 2018.7/5J 2019.4/5G 他)	
	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	(2018.5/8G 2018.7/4I)	山の寺~吉田山登山道北側樹林
	シロハラ	<i>Trudus pallidus</i>	(2018.1/7F 2018.3/9H 2019.2/5E 2019.4/7E 他)	
	ツグミ	<i>Trudus naumanni</i>	(2017.5/6G 2018.1/6H 2019.4/5C 2018.39G 他)	
ウグイス	ヤブサメ	<i>Cettia squameiceps</i>	(2017.6/5H 2018.4/2F 2019.5/2F/3F/2G 他)	
	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	(2017.5/7D 2018.2/6D 2018.4/2F 2019.5/2H 他)	
ヨシキリ	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus arundinaceus</i>	(2017.7/9F 2017.6/7B 2018.6/8C 他)	下平天竜川ヨシ原で囀り
ムシクイ	メボソムシクイ	<i>Phylloscopus borealis</i>	(2018.6/4D)	牛牧敷で囀り 渡りの途中
	エゾムシクイ	<i>Phylloscopus tenellipes</i>	(2017.5/5E/6G/3H 2018.57E 2018.74J 他)	
	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus occipitalis</i>	(2017.5/5F/4G 2018.5/5I/2F/8G 2019.5/3F 他)	
ククイタダキ	ククイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	(2018.1/6H 2018.5/4G 2018.7/4J 2019.3/5I 他)	
ヒタキ	キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	(2017.5/8F 2018.5/6C 2018.7/5J 2019.4/5G 他)	
	オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	(2017.5/10G 2017.6/3E 2018.7/3K 2019.4/5G 他)	
	コサメビタキ	<i>Muscicapa latirostris</i>	(2017.5/5I 2017.6/5H 2018.5/5H 他)	2017.6/5H (巢作り中)
カササギヒタキ	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	(2017.6/5F 2018.6/6G/7G 2019.6/5F 2019.7/6C)	RL (環 - / 県 VU)
エナガ	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	(2017.5/4G 2018.1/6G 2019.3/5I 2019.5/2G 他)	
シジュウカラ	コガラ	<i>Parus montanus</i>	(2018.1/3G 2018.5/5H 2019.5/2H)	
	ヒガラ	<i>Parus ater</i>	(2017.5/5I 2018.7/7H 2018.7/2K 2019.2/3G 他)	
	ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	(2017.5/4F 2018.1/6I 2018.5/5H 2019.2/7G 他)	
	シジュウカラ	<i>Parus major</i>	(2017.6/5G 2018.1/9F 2018.5/2E 2019.4/7D 他)	
	ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	(2018.3/4J 2018.7/2K 2019. 2019.5/2G 他)	
キバシリ	キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>	(2017.5/2K 2018.3/4J 2019.2/4H 他)	
メジロ	メジロ	<i>Zosterops japonica</i>	(2017.6/3D 2018.1/7F 2018.5/8G. 2019.2/6C 他)	

3. 高森町の動物

科名	確認種		確認情報 (年・月 / メッシュ)	備考
	和名	学名		
ホオジロ	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	(2017.6/2E 2018.1/6H 2018.5/4D 2019.27G 他)	
	カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	(2018.1/6H 2018.4/7E 2019.2/5C 他)	
	ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans</i>	(2018.3/4F)	堂所上林縁敷で1羽
	アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	(2018.1/9F 2018.2/6E 2019.2/6C 2019.5/2F 他)	
	クロジ	<i>Emberiza variabilis</i>	(2017.5/3J 2018.1/7E 2018.7/3K 他)	本高森登山道付近で繁殖の模様
アトリ	アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	(2018.1/5I 2019.2/6C 2019.4/7E 他)	
	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	(2017.5/5F 2018.1/9F 2018.6/4D 2019.2/7G 他)	
	マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	(2018.1/6H 2019.3/5H 他)	
	イスカ	<i>Loxia curvirostra</i>	(2018.3/4G 2018.3/3E 2018.7/4J 他)	堂所～吉田山登山道松林約20羽
	ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	(2018.1/4F 2018.3/9F 2018.12/6I 2019.3/4F 他)	
	ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	(2018.1/3G 2018.3/5J 2019.2/4F 他)	
	イカル	<i>Eophona personata</i>	(2017.5/4F 2018.5/8G 2018.2/6D 2019.4/7E 他)	
	シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	(2018.2/6E 2019.1/5E)	大島川流域の樹林で1羽
スズメ	スズメ	<i>Passer montanus</i>	(2017.7/10F 2018.5/6C 2018.2/7C 2019.4/5C 他)	
ムクドリ	コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>	(2017.7/7B/8C 2018.6/7C/7D)	大島川横の人家屋根で営巣
	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>	(2017.7/10F 2018.1/5C 2018.6/4D 2019.2/7F 他)	
カラス	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	(2017.6/8G 2018.1/3H 2018.5/2E 2019.3/5I 他)	
	オナガ	<i>Cyanopica cyana</i>	(2019.8/6B 2019.8/7F 2019.8/6G)	
	ホシガラス	<i>Nucifraga caryocatactes</i>	(2019.5/2G)	
	ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	(2017.5/4G 2018.1/7D 2018.6/8C 2019.2/5E 他)	
	ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	(2017.5/2E 2018.2/7I 2018.5/8G 他)	
チメドリ	ソウシチョウ	<i>Leiothrix lutea</i>	(2017.5/3K 2017.7/4H 2019.5/2G 2018.7/4J 他)	特定外来生物
	ガビチョウ	<i>Garrulax canorus</i>	(2019.7/6D)	特定外来生物 大丸山周辺に短時間出現

【2016年以前に確認している種】ゴイサギ・アマサギ・チュウサギ・タゲリ・コアジサシ・アオバズク・ヤマセミ・ハチジョウツグミ

*希少種は、レッドリストのカテゴリーをRL(環境省/長野県)で記載した。(CR:絶滅危惧IA類、EN:絶滅危惧IB類、VU:絶滅危惧II類、NT:準絶滅危惧、N:留意種、DD:情報不足)

*外来種は、外来生物法によって特定外来生物に指定されているものは特定外来生物と記載し、特定外来生物以外の生態系被害防止外来種リスト記載種は、生態系被害防止外来種と記載した。

●参考・引用文献

伊那谷自然教育研究会 (1993) 中央アルプスと伊那谷の自然. 信濃毎日新聞社.

大原均・堀田昌伸 (2006) 飯田市上村におけるソウシチョウ *Leiothrix lutea* の生息状況. 長野県環境保全研究所研究報告 2 : 65-68.

小笠原昭夫ら (監) (2006) 中部の水辺 鳥類図鑑. 中部地方整備局・中部技術事務所.

下伊那教育会生物委員会 (2001) 下伊那誌 生物編. 下伊那誌編纂委員会.

信州鳥類生態研究グループ (1977) 長野県の野鳥. 長野県.

高野伸二 (編) (1994) 日本の野鳥. 山と溪谷社.

中村登流 (1972) 森のひびき. 大日本ジュニアブックス.

中村登流・中村雅彦 (1995) 日本野鳥生態図鑑 陸鳥編. 保育社.

橋都正 (2014) 絶滅危惧種の珍鳥「ミゾゴイ」. 伊那史学会.

羽田健三・寺西けさい (1968) オオヨシキリの生活史に関する研究 II Polygyny and territory. 日本生態学会誌 18(5) : 204-212.

羽田健三 (編) (1986) 鳥類の生活史. 築地書館.

Hitoshi Ohara and Satoshi Yamagishi (1984) The First Record of Helping at the Nest in the Short-tailed Bush Warbler *Cettia squameiceps*. 鳥 33 : 39-41.

Hitoshi Ohara and Satoshi Yamagishi (1985) A Helper at the Nest of the Short-tailed Bush Warbler *Cettia squameiceps*. 山階鳥研報 17 : 67-73.

堀田昌伸・大原均・齊藤信・杉山要・北沢千文 (2011) 長野県における特定外来生物 (鳥類), ソウシチョウ *Leiothrix lutea* とガビチョウ *Garrulax canorus* の生息状況. 長野県環境保全研究所研究報告 7 : 19-22.

丸武志 (1988) なぜ雄は美しいかー乱婚制のキジ社会ー. アニマ 195.

山岸哲 (1962) カラスの就婚行動について 第1報 長野県下での秋冬の峙について. 日本生態学会誌 12 (2) : 54-59.